

# 【みすてられた島】決定稿

作・中津留章仁

秋田雨雀・土方与志記念

青年劇場上演台本

二〇一七年改訂

スタッフ

演出〓中津留章仁

美術〓乗峯雅寛

照明〓石井宏之（有限会社ブライト）

音響効果〓佐藤こうじ（Sugar Sound）

衣裳〓宮岡増枝

舞台監督〓青木幹友

宣伝美術〓増田絵里（Design Port）

製作〓福島明夫

キャスト

児島大作（61） 島長

児島泰江（58） 大作の妻

児島国彦（30） 大作の長男

児島範子（27） 大作の長女

椿ゆかり（29） 女

船江 亮（28） 漁師 範子の恋人

春日昌平（60） 島議会議員 元魚市場

鳴海耕造（58） 海産物工場代表取締役

島村 昇（52） 漁業組合長 漁師

貞升恵美（48） 島議会議員 元新聞社

矢内千佳（49） 児島の隣人

磯辺 栄（44） 島議会議員 元教師

第一場

舞台は、とある島の、島長（しまちょう）である児島大作の家。築50年は過ぎていると思われる日本家屋に、10年程前増築した形跡が見られる和洋折衷。和風な応接間と廊下、二階へと通じる階段がある。廊下の奥には玄関、トイレ、風呂場などがある。廊下の突き当たりに洋風なリビングがあり、ソファとテーブルが置かれている。リビングの隣には台所があり、お勝手口から、外へと通じている。また、応接間の手前は庭へと通じており、庭からも出入りが出来る。応接間の欄間にかけてある上着。

台所では泰江が煮物の味見をしている。

廊下から、濡れた髪を拭きながら範子が現れる。範子は台所へ行くと、冷蔵庫のドアを開け、缶ビールを取り出す。

蝉やカモメの鳴き声と、

遠くで聞こえる船の汽笛。

何処にでもある、

何処か懐かしい

田舎の風景……。

20XX年、

夏の、

夕暮れ……。

泰江「御飯よ」

範子「いらない」

泰江「え？」

範子「友達、来るから」

範子は缶ビールを開けて一口飲み、リビングに行く。うとする。

泰江「待ちなさい」

範子立ち止まる。

泰江「友達って、あの人？」

範子「関係ないでしょう」

泰 江「何度も言うけどね、母さん、あの人」

範 子「嫌いなんでしょう」

泰 江「漁師より、会社勤めしてる人の方が、母さん良いと思うけど」

範 子「もう放つといて」

国彦の声「ただいま」

泰 江「おかえり」

範 子「おかえり」

廊下から、スーツ姿の国彦がリビングにやって来る。  
鞆を置き、辺りを見回す。

国彦「父さんは？」

範 子「見てない」

範子はテーブルの上のリモコンを取り、テレビを点ける。テレビから流れるニュースの音声。

ニュース音「……氏は、戦後の処理が最優先だと語り、ご遺族の補償を一番に考え、一日でも早く復興出来るよう最善を尽くすと述べました。次のニュースです……」

泰江が台所からリビングに顔を出す。

泰 江「テレビかえて。戦争のニュースもいい加減聞き飽きたよ」

範子はチャンネルをかえる。

国彦「父さんは？」

泰 江「一緒じゃなかったの？」

国彦「随分前に出た。上着あったよ」

泰 江「ええ？（と応接間の上着を確認して）あ、本当ねえ。今日、偉い軍人さんと話すって」

国彦「この島、切り離されるかもしれない」

泰 江「え？」

国彦「本土から」

範 子「どういうこと？」

国彦「わかんない。役所で噂になってる」

泰 江「戦争で？」

国彦「だと思っただけ」

範 子「おかしいよ。勝ったのに」

国彦「負けたんだよ」

泰江「もう終わったんだから、どっちでもいいのよ」

と泰江は台所で食事の支度をする。

範子「え、本土に切り離されたら、私達どうなるの？」

国彦「さあ」

範子「いや、ありえないでしょう」

テレビからバラエティ番組らしき笑い声が聞こえる。

国彦「……」

玄関の戸が開く音。国彦は玄関の方を見る。

船江の声「……こんにちは」

範子は玄関の方へ向かう。国彦は玄関の方へ軽く手をあげて挨拶すると、泰江の方を見て、二階に上がる。泰江は声が聞こえているのかいないのか、食事の支度をしている。範子と船江が廊下からやって来る。船江は発泡スチロールの箱を持っている。

範子「(小声で) 良いって、そんなことしなくても」

船江「もう持って来たんだから」

範子「(小声で) 貸して」

船江「俺が渡す」

と、範子が発泡スチロールの箱を取り上げようとするが、船江は渡さない。船江は台所の泰江に声をかける。

船江「あの……あの」

泰江「(振り返り) ……ああ、いらっしやい(と会釈する)」

船江「あの、これ……今日穫れた奴……良かったら」

泰江「まあ、そんな、いいのに」

船江「どうぞ」

泰江「……そうですか。じゃあ遠慮なく(と受け取って) どうもすみません、わざわざ」

船江「いいえ」

泰江「良かったわね、また船が出せるようになって」

船江「ええ。今まで働けなかった分、暫くは休まず出るつもりです」

泰江「まあ、どうぞごゆっくり」

船江「はい」

泰江は台所で支度の続きをする。範子は船江はリビングに連れて来る。

範子「(小声で)急にあんなの持って来ないで。御機嫌取ろうとしてるのが見え見えよ」

船江「(小声で)俺のこと嫌ってるって言うから」

範子「(小声で)逆効果よ」

船江「どうしろっていうんだ？」

範子「そのままでもいいの」

船江「……いつまでも、このままって訳にはいかねだろう」

範子「……髪乾かしてくるから、部屋行って」

船江「……」

範子は洗面所に去る。船江は二階に上がる。

入れ代わるように、庭から大作が現れる。大作は庭から応接間に入り、紙袋を置くと、隅に重ねてある座布団を一枚取り、座卓の脇に置いて座る。老眼鏡をかけ、紙袋から買って来た書籍を開いて目を通し始める。その間、矢内千佳がやって来て、お勝手口の戸を開く。

千佳「泰江さん」

泰江「あら」

千佳「これ、お借りしてた器」

泰江「ああ、はいはい」

千佳「夕飯まだ？」

泰江「うん、これから」

千佳「これ、うちで漬けたぬか漬け、良かったら」

泰江「まあ、そりゃあすみません」

千佳「こちらこそ。いつも戴いてばかりで」

泰江「作り過ぎちゃうのよ、私は。気い使わないでね」

千佳「……あの」

泰江「うん？」

千佳「国彦君、本土の高校に通ってましたよね」

泰江「そうだけど」

千佳「下宿先、どうやって探しました？」

泰江「ああ、あの子の場合はね、学校が紹介してくれたのよ。」

何、陽平君本土の学校受験するの？」

千佳「島の高校じゃねえ」

泰江「いや、お金はかかるけど、大学行かせたいならその方が  
良いって」

千佳「ですよ」

泰江「そうよ、あなた、大学行って本土で就職したらいいのよ。

この島にいてもねえ、鳴海物産くらいしかないんだから」

千佳「まあ受かるかどうかわかりませんが、そうだったら、  
いろいろ教えて下さい」

泰江「うん、何でも聞いて」

千佳「じゃあ、御免下さい」

泰江「はい、ありがとうございます」

千佳は去る。この会話の最中、大作は本を読んでいるがさっぱりわからない様子。大作は立ち上がり台所へ行く。料理の味見をしている。

大作「おい」

泰江「あら、帰ってたの」

大作「憲法ってどうやって作るんだ？」

泰江「はい？」

大作「憲法」

泰江「さあ、知らないねえ。それどこの料理」

大作「料理じゃない。あのほら、憲法何条とかっていう……」

泰江「お父さん、それ漢方よ」

大作「うん？」

泰江「何錠っていうのはお薬でしょう」

大作「ああ……いや、もういい（行こうとして、振り返り）……  
…今晚、寄り合いするぞ、うちで」

泰江「ええっ？急に言われても何も無いわよ。何人来るの？」

大作「5、6人だろう」

泰江「お酒買って来なきゃ」

大作「いいよ。お茶だけ出してくれ」

泰江「そういう訳にはいきませんよ」

大作「酒呑んで話す内容じゃない」

泰江「何を話すの」

大 作 「島が独立するかもしれん」  
泰 江 「ああ、本土から切り離されるかもって国彦が言ってたけど、そのこと？」  
大 作 「何で知ってるんだ、あいつ」  
泰 江 「そんな馬鹿な話がありますか」  
大 作 「いや、そうならないようにこれからお願いするつもりだが」  
泰 江 「大丈夫よ、お父さん。そんな、島が独立なんて出来っこないんだから」  
大 作 「だけど、可能性は相当低いから、その方向で調整してくれってさあ」  
泰 江 「戦後っていうのは混乱してるからおかしなことが良く起きるって、テレビで言ってたわよ。放つときや良いのよ」  
大 作 「暢気なこと言ってるんじゃないよ、ったく」  
泰 江 「興味ないもん、そんなの」  
大 作 「お前大変なことなんだぞ、これは。島が心配じゃないのか？」  
泰 江 「それより私は範子の方が心配」  
大 作 「範子がどうした？」  
泰 江 「あの彼氏」  
大 作 「船江か」  
泰 江 「漁師は収入が不安定よ」  
大 作 「だけど戦争が終わって、船は出せるようになったんだ」  
泰 江 「嫁に出すなら会社勤めの方が安心よ。今ね、来てるのよ、船江さん。さっき私に、珍しく魚なんか持って来ちゃって、あの無愛想が。どうするの、結婚したいなんて言ってきたら。無理だって、ちゃんと断ってよ」  
大 作 「知らん。今そんな話しなくていいだろう」  
泰 江 「島がどうなるかなんて、話が大きすぎて実感湧きやしないわよ。ねえ、あなたから範子に言ってやって、別れた方が良いつて」  
大 作 「それどころじゃない」  
        大作の携帯が鳴る。  
大 作 「……あ……兎に角、そういうことだから」



泰江「はいはい、わかりました」

大作は応接間に向かう。

大作「(電話に出て)……ああ、もしもし、すみません急に……留守電お聞きになりました?……ええ、そういうことなんですよ。それで、議会で決める前に、たたき台を作らないと……ええ……」

国彦が二階から降りて来る。

大作「先生今日夜お時間ありますか?……今からうちで話し合いをすることになりました……そうですか……じゃあどなたか……はい、お願いします……お待ちしております。はい……はい(と電話を切る)」

国彦「父さん、島が」

大作「その話誰に聞いた?」

国彦「役所の上の人間が話してるのを、同僚がたまたま」

大作「まだ言うなって言ったのに」

国彦「じゃあ本当なんだ」

大作「……ああ」

国彦「そんな……こんな小さな島、本土なしじゃやってけないよ」

大作「それでもやらないとしょうがない」

庭から春日昌平がやって来る。

春日「大作さん」

大作「おう春日君、すまんなあ、急に」

国彦「こんばんは」

春日「おう」

大作「おーい、お茶」

泰江「はい」

台所の泰江はポットに水を入れ、お茶葉を取って急須に入れる。

春日「一体どうなってるんだい」

大作「さっき話した通りだ」

春日「何でこの島だけ?」

大作「あれ、あんたには言わなかったっけ?」

春日「聞いてないよ」

大作「他の土地は連合軍の監視下になるらしいんだが、この島だけ申請を忘れたんだそうだ」

春日「おかしいでしょ」

大作「なあ」

国彦「そういうこと」

大作「ああ」

春日「で、来月から？」

大作「うん」

春日「随分急だよねえ、独立する方の身にもなってくれって話だよ」

大作「あとひと月しかない」

国彦「何とかこの島も入れて貰えないの？」

春日「そうだよ。政府に嘆願書を書くとかさあ」

大作「それはもう国彦の上司に頼んである。だけど、連合軍のお偉い軍人さんの話だと、軍も戦後の復興作業でそれどころじゃないらしい。可能性は極めて低いとおっしゃってた」

春日「この島は誰が何と言おうと本土のものなんだから」

大作「俺だって何度も頭下げたよ。けどどうしても無理だつてさあ。停戦の条項にそう書いてしまったからって。今更内容を変えられないんだそうだ」

国彦「じゃあ……この島は、みすてられるってこと？」

大作「……そういうことだ」

春日「困ったもんだねえ」

春日は置いてあつた憲法の本を開く。沈黙。

泰江「春日さん、こんばんは」

春日「ああ、お邪魔してます」

泰江は廊下を通り過ぎて、玄関の方へ去る。

国彦「島民に知らせなくて良いの？」

大作「知らせるさ」

国彦「いつ？早い方が良いよ」

大作「だけど、何も決めずに知らせたら、島民は混乱するだけだろう」

国彦「時間がないよ」

大作「だから今から集まって話し合おうんじゃないか」

泰江がお中元の箱を持って廊下から出て来る。

大作「泰江、お茶」

泰江「今やってます」

泰江は台所へ向かう。

国彦「そうじゃなくて、本土に引越したい人だっているでしょう」

泰江は立ち止まって話を聞く。

大作「……え？」

春日「ああ、そうか。独立したら違う国になっちゃうもんなあ」

国彦「本土と島、どちらに住むかは島民の自由だよ」

泰江は話の内容に耳を傾けながら台所へ行き、お中元の包みから羊羹を取り出して切ると、丁寧に一皿づつ盛りつける。

春日「当然だな。大作さん、告知を遅らせた方が混乱するかもよ」

大作「そんなことはわかってる」

国彦「どうして知らせないの」

大作「本土と島だったら、本土に住みたいに決まってる」

春日「何それ」

国彦「島の人間が少なくなるから言わないってこと？」

大作「そうだ」

春日「いや、それはおかしいよ」

大作「春日君、ただでさえ人が少ないんだ。これ以上島の人口が減っても良いのか？」

春日「いくらあなたが島長でも、本土に住みたい島民を止める権利はないでしょう」

国彦「春日さんの言う通りだよ」

泰江は応接間に行く。

泰江「ちよっと」

大作「ああ、すまん（と振り返り）……うん？お茶は？」

泰江「ねえ、独立したら、島の人間は本土に行けなくなるの？」

大作「うん？」

泰江「駄目よ、そんなの」  
大作「何が」  
泰江「お隣の千佳ちゃん家の陽平君、本土の高校受験するって  
言ってるのに」  
大作「うん？」  
泰江「陽平君が本土の高校行けないじゃない」  
大作「お前は話に入って来るなよ、ややこしくなるから」  
国彦「いや、そういう人がいるってことを父さんは知るべきだ」  
泰江「そうよ」  
大作「うるさい。お前もなんだ、話に入ってくれなんて頼んだ  
覚えはないぞ」  
国彦「僕は役所の人間だよ」  
大作「何だ、半人前のくせに」  
国彦「もうすぐ30だよ」  
春日「だけど……学校には行けるんじゃないかな？」  
大作「え？」  
春日「だって、海外の学校に留学する人はいるじゃない。独立  
しても、そういうのは出来ると思うけど」  
国彦「ああ、そっか」  
泰江「あ、そう。だったら良いわ」  
と、泰江は台所に向かう。  
大作「何なんだ、お前は」  
        範子が廊下からやって来る。  
        範子「何騒いでるの」  
泰江「島が独立するんだって」  
        範子「それ本当なんだ」  
        国彦「うん」  
        範子「ヤバイじゃん、私どうなるの？」  
        大作「今まで通り、この島で暮らせば良い」  
        範子「そうじゃなくて、私、本土の会社に勤めてるんだよ。独  
        立したら、クビになるの？」  
春日「ああ、範ちゃん船着き場の、観光会社だもんね」  
        範子「はい。それいつから」  
        国彦「来月だって」

国彦は携帯を取り出し、メールする。

範子「え？ちよっとマジで？電話してみる」

大作「船の会社には、役所から連絡してる。そのうちかかってくる」

範子「どうするのよ、クビになったら。この島で仕事探すの大変なんだから」

大作「クビにはならん。独立後も、これまで通り朝と昼の二便は出して貰うようお願いした」

範子「……だよね。船がないと、どこにも行けないもんね」

島村が自転車ですり込んで来る。籠には紙袋がある。

島村「こんばんは」

大作「おう、昇」

島村「春日さんもいたんですね」

春日「ああ」

国彦「こんばんは」

島村は自転車を停める。

大作「お前がクビになることはない。心配するな」

範子「そう、なら良いけど」

島村が紙袋を持って庭から応接間に上がる。範子は二階に上がる。

島村「島長、電話で話したけど、俺もう酒呑んじゃってるよ」

春日「漁師は昼過ぎから呑むからなあ」

大作「構わん。漁業組合の人間には居てもらわないと」

島村「いや、それよりえらいことになってるじゃないですかあ……で、どうするの？」

春日「島長が告知を渋ってるんだ」

島村「うん？何で？」

春日「早めに告知したら皆本土に行つて、島の人口が減るって。そういうのってよくないよなあ？」

島村「いやあ春日さん、そりゃあ間違ってるよ」

春日「どうして？」

島村「島の人口が減っちゃあ駄目でしょう」

大作「そうだよなあ」

国彦「だけど、島と本土じゃ暮らしやすさが全然違います」

島村「何言ってんだ国彦、こんな非常時に島を捨てる人間なんか認めちゃいけねえよ」

春日「昇、島のことを考えているのはわかるけどな、個人の自由は尊重するべきだ」

島村「何それ……ねえ、二人ともこの島愛してねえの？」

春日「何言ってんだよ、俺は議員になるまで魚市場でしか働いたことがないんだから。今更他の土地で生きられっこないさ」

島村「だったら島の将来を一番に考えるべきでしょうが。島民が多いのと少ないの、これどっちが島の為なの？ねえ？」

国彦「本土出身者を拘束するのはおかしいです」

大佐「何で？」

国彦「そんなことをしたら、国際問題に発展するよ」

大佐「国際問題？」

春日「ああ、そうだよ」

国彦「よく考えて。本土出身者を帰さなかったら、父さんは本土の人間から独裁者なんて言われて、下手したら、それで歴史に名を残してしまうかもしれないよ」

大佐「独裁者？いやいや、そりゃあ駄目だ」

島村「だけど歴史に名を残すなら、或る意味凄いことじゃないですか」

大佐「冗談じゃないよ。独裁者っていったらあれだろう、ヒトラーみたいに悪い奴ってことだろう」

島村「島長何日和ってんすか」

大佐「ヒトラーみたいには思われたくない」

国彦「じゃあ、本土の人間は帰すんだね？」

大佐「だが強制じゃないぞ。このまま島に住みたい人はいてもらえば良い。どちらにするか、本人に選んで貰う」

春日「島の出身者は出られないの？」

島村「それは無条件で外出禁止でしょう」

国彦「僕は反対です」

島村「何だお前、本土に行きてえのか？」

国彦「僕は役所の人間だから残らなきゃなりません。これからが大変ですからね。だけど、若い人やこれから就職する

子は、この島を出たいと思うはずです。何処に住むかは島民の自由です」

鳴海の声「こんばんは」

大作「はい」

と、大作は立ち上がって、廊下に出る。

大作「ああ、社長、急にお呼びたてしてすみません。どうぞ」

鳴海が廊下から応接間に入ってくる。

鳴海「こんばんは」

島村「ああ、どうも」

春日「こんばんは」

大作「鳴海社長いらっしゃったぞ。お茶一つ追加」

泰江「もうやっています」

大作「どうぞ、社長」

鳴海「はい。大変なことになりましたねえ」

大作「本当、どうしていいもんやら」

大作に促されて、鳴海は座る。泰江がお茶とお茶菓子を持って応接間にやってくる。

泰江「はい、お待ちせ」

春日「ああ、すみません」

泰江「いいえ。昇はお酒の方がいいんじゃない？」

島村「本当はね」

泰江「島が独立するだか何だか知らないけどねえ、そうなたら私、お茶汲みだけはしなくて済むわよねえ」

大作「何で？」

泰江「だって、私ファーストレディーって奴でしよう？」

島村「ああ、そうだ、泰江さん大統領婦人だよ」

泰江「私に務まるかしら。嘘をついたり、忖度させたり。」

島村「(笑いながら)偉くなくても俺のこと忘れないでよ。いただきます」

泰江「本当何もわかってない。だからあんたはおたんこなすなのよ」

島村「はあ？何だよいきなり」

泰江「おたんこなすでしようが。調子こいて若い女と浮気して、それで嫁に愛想つかされて離婚して、挙げ句の果てに浮

気相手にも逃げられたじゃない。そうやってへらへら笑ってる場合」

島村「余計なお世話だよ」

泰江は台所に行く。

大作「……え？俺、大統領になるのか？」

島村「そうじゃないの？」

春日「まあ、大統領なのか首相なのかはわからないけども、最高責任者であることにはかわりないよ」

大作「ちよつと待てよ。俺は島長くらいしか出来ないよ。大統領なんて大役は無理だ」

鳴海「だけど、島長やってる人が自然と大統領ってことになりまずでしょう」

大作「じゃあ俺、他の国の大統領と話さなきゃなんない訳？」

鳴海「まあ、場合によっては、ですけど」

泰江「(台所から飛び出して)お父さん、いいじゃないそれ。他の国の大統領に挨拶に行こうよ、ねえ？」

大作「何言ってるんだ、お前は」

泰江「だって、ただで海外旅行出来るなんて最高じゃない」

大作「いちいち話に入って来るな」

泰江「そんな怒んなくなつて良いじゃない。新しい国が出来るんだからご挨拶に行くべきでしょう、礼儀として」

大作「俺なんか気の利いたこと話せる訳ないだろう。第一外国語喋れないんだから」

鳴海「まあまあ、話す機会はそうないと思いますので」

大作「そうですね？」

泰江「なあんだ、残念」

国彦「母さん、お願いだから向こう言つて。今凄く大事な話をしてるから」

泰江「はいはい」

泰江は風呂場へ行く。

春日「それよりいい加減、島出身者が本土に行くことを認めるかどうか決めないと」

国彦「そうですよ」

鳴海「ああ、今そういうお話を？」



春日 「大作さんが、告知を渋っているんです」

鳴海 「え？何故です」

大作 「いえ、本土出身者は無条件に帰すとしてもですね、これを機に、島出身の人間が本土へ出たがると思うんです」

鳴海 「ああ、どうですかねえ。どの程度いるんでしょうか」

国彦 「結構いると思います。僕だって、役所で働いてなかったら島より本土を選ぶかもしれません」

春日 「やっぱり、この島じゃあ仕事に限られてるからねえ」

国彦 「僕は今すぐ独立する件を告知して、島民が島と本土のどちらで生きるか、それを選択する権利を尊重すべきだと思います」

大作 「鳴海社長はその辺どうお考えですか？」

鳴海 「まあ、出たいて人は出たらいんじゃないですか。島の人間にも本土に住む自由は与えるべきでしょう」

大作 「人口が減るんですよ。こんな小さな島でどうやってやっていくんですか？」

鳴海 「島長、そんな悲観的なことばかり考えるのやめにしませんか」

大作 「いや、勿論私だってね、出来ることなら島民に自由を与えてあげたいんです。島の人口を心配しているのはね、財政の問題なんですよ」

島村 「財政？」

大作 「考えなきゃならないのは、これからは全て島民の税金でやりくりしなきゃならないってことだ。これまで一番あてにしていた国からの補助がなくなるんだぞ？道路なんかの公共工事は、このお金で成り立ってたんだ。これじゃなかったら何も出来ない。大体、島民は8千人ちよつとしかいないんだ。納税者もつと少ない。それでどうやって道路を作るんだ？え？何処の金で港を整備する？」

鳴海 「いや、島民が減るとは限らないでしょう」

大作 「……え？」

島村 「今、何ておっしゃいました？」

鳴海 「ですから、まだ島民が減ると決まった訳ではないと言っただけです」

春日「あの、すみません、それはどういう意味ですか？」

鳴海「皆さん悲観的に考えているかもしれないがねえ、いや私だつてそうですが、そんなこと考えたつて埒があきません。島を出たい人は大勢いるでしょうけど、それ以上に、本土から来たい人がいると信じましょう」

国彦「そんな人いるでしょうか？」

鳴海「少しはいますよ。戦争で、本土の政治に嫌気がさしている人も少なからずいるはずです。独立する島があるとなつたら、否が応でも興味が湧く人はいますよ」

国彦「ですが、もう戦争は終わりました」

鳴海「世界の紛争を考えてご覧なさい。停戦したかと思つたら、数年後にまた始まる。紛争とはそういうものです。また向こうが仕掛けて来たら、いつでも始まりますから」

島村「ああ、その可能性はあるつて、新聞にも書いてあつたなあ」

鳴海「いつまた戦争が起きるかわからない国に、住みたくない人は当然いると私は思います」

国彦「成る程、一理ありますね」

大作「ですけど社長、島の生活は不便ですよ。それに違う国の人間になつてしまいますし、親や親戚と離れてしまう不安とかありませんかねえ」

鳴海「いや、国籍まで変えなくても、島に住んだら税金も払つて貰うという仕組みを作れば良いじゃないですか」

大作「ああ、電話で仰つていた件ですか」

鳴海「要は、経済が重要です。この島で働ける場所を作れるかどうかですよ。本土の人間もパスポートが必要になるかもしれません、会いたいと思えばいつでも会えますしね。それに、本土は放射能汚染の問題だつてありますでしょう。島がこの先どれだけ発展したとしても、原発を誘致しなければならぬほど電力に困るということはないでしょうから」

春日「そうか。本土から人が来るなんて発想は全然なかつたけど、社長の話を聞くと、なんだかそんな気もして来るよなあ」

鳴海 「上手くアピールすれば、2、3万人は来るんじゃないですかね」

大作 「ですけど、本当に来るって確証がある訳じゃありません。そういう捕らぬ狸のなんちゃらで、島の人間の流出を許して良いんでしょうか？」

鳴海 「島民の自由を奪う方が大問題ですよ」

春日 「俺もね、社長、さつきからずっとそれを言ってるんですよ」

大作 「大問題というのは？」

鳴海 「島民の人権を奪っている訳ですから。もしそれを許さなかったら、例え戦後の状況下だったとしても、島長は極悪人だと言われて、未来永劫語り継がれるかもしれませんよ」

大作 「ご、極悪人？」

島村 「それって、教科書に載ったりするレベルですか？」

鳴海 「それはどうかわかりませんが」

大作 「でも……ヒトラーより悪いってことはないですよね？」

鳴海 「ヒトラーは当時ドイツ国内で支持がありましたからね。因みに告知を遅らせたいと思ってる方はどなたですか？」

誰も手を挙げない。

鳴海 「……ああ、誰もいないんですたら、それは島長の独断ということですから、そういう意味ではヒトラーより悪いということになりますかね」

大作 「ちょ、ちょ、ちよつと待って……何だよ昇、お前何で手え挙げないんだ」

島村 「いや、社長が言っていることは間違っていないと思うよ。要はさあ、告知を早めたら、島の人間が出て行く代わりに、本土からも集めやすいつてことでしょうか？ハイリスクハイリターンで奴だけけど、そっちの方が人口が増える可能性ある訳だから。だったら俺はそっちにかけたいね」

大作 「お前なあ、魚みたいに今日は穫れませんでしたじゃありませんよ。魚みたく、島だけの話に限ったことではありませんよ。本土だって生活しやすい都市部に人口が密集

して、田舎の方は人口が減ってるらしいんですよ。現代人は、住み易さを求めているんです。」

鳴海「確かに、島には大した産業はありません。しかしですね、戦争をするような不安な国に生きていくことを考えたら、いつそのこと平穏な島で暮らしてみようと思う人間だっていますよ。というより、それにかけるしかありません」

大作「うーん……」

春日「どうするか、大作さんが決めるべきだよ」

大作「……うん……そういうことなら、社長の話を信じて、島の人間は本土に住んでも良しとするか」

国彦「決まりだね」

大作「ああ」

国彦の携帯にメールが入る。それを見て国彦はリビングへ行き、携帯を取り出し電話をかける。

春日「トイレ借りるよ」

大作「うん」

春日はトイレに去る。

大作「参ったなあ」

鳴海「何がです」

大作「私役所にですね、島をみすてるなって、政府を批判する内容の記事を書いて貰えるよう各新聞社に文書を送れと言ったんですが、やめた方が良いですかね？」

鳴海「いえ、それはやった方がいいです。是非やって下さい」

大作「そうですか」

鳴海「ただあの政府じゃねえ、私達島の人間のことなんて屁とも思っていないでしょうから、どうせ結果は変わらないと思いますけどね」

大作「やっぱりそうですね」

鳴海「我々は独立に向けて、粛々とやることをやらなきゃなりません。ああ、やだやだ」

大作の携帯が鳴る。

大作「あ、ちょっと失礼します……もしもし……」

と、大作は携帯を持って話しながら、廊下から玄関の方へ去る。鳴海は本を手にとって読み始める。島

村は携帯を弄る。風鈴が鳴る。

国彦「……（留守電に残す）あ、国彦です……そういうことになつたんだ。取り敢えず一度、会って話せないかな」

貞升の声「御免下さい」

大作の声「あ、どうも……国彦、お客さん。国彦」

国彦「今家に居るから……連絡下さい……では」

と、国彦は電話を切ると、玄関へ向かう。玄関で雑談している声が聞こえる。島村が廊下に出る。春日が戻って来る。

鳴海「どなた？」

春日「貞升さん」

鳴海「あーあ」

玄関の方で話し声。

鳴海「こつち来ないの？」

春日「大作さんが、仏壇を見せるんでしょう。あれはなかなかのもんですよ」

鳴海「え？私には何も言ってくれませんでしたよ」

春日「社長には恥ずかしくて言えなかったんじゃないですか？そういう人ですから」

国彦が廊下からやって来て、お茶を煎れる為に台所へ向かう。

鳴海「なんだ。私も、ちょっと見て来て良いですか」

春日「ええ、どうぞ」

鳴海は廊下へ立つ。

範子の声「待ってよ……亮ちゃん」

二階から船江が降りて来る。後を追って、範子がやって来る。

春日「おう」

島村「あれ？お前いたんだ」

船江「……」

春日「あ、漁師の船江です。鳴海物産の社長さん」

鳴海「鳴海です」

船江「……（会釈する）」

鳴海は玄関の方へ去る。

範子「上で話そうよ、ね？」

船江「(会釈をして)……昇さん、島がみすてられるって本当ですか？」

島村「ああ」

船江「補助金がなかったら、やっつけてねえ」

春日「補助金で、戦争で船出せなかった、あれ？」

島村「はい」

船江「後、半年は貰えるって」

島村「そうはいってられんだろうなあ」

船江「何とかならねえんですか」

島村「違う国になるんだぞ」

船江「勝手じゃないですか。俺達には働くなって言っておいて、急にみすてるなんて」

範子「もういいじゃん、辞めよ、ね？」

島村「戦争だったんだ。しょうがねえ」

船江「(呟くように)……他の島は……船出してるどころ、ありません」

島村「あ？……何が言いてえんだ手前？……なあ？」

春日「昇」

船江「(呟くように)昇さんが……本土のクソ政府のいうことなにか聞くから」

島村「(立ち上がって)おい、もっぺん言ってみろ手前、コラ……」

範子「御免なさい昇さん」

春日「辞めろって、ほら(と止めに入る)」

春日に止められる島村。

島村「仲間が死んだんだよ！……手前死にてえのか、なあ？」

渋々腰を下ろす島村。

範子「昇さんに言ったってどうにもなんないでしょう？何でそれがわかんないの？」

島村「俺だって、政府から船を出すなって言われてたのによお、最初は言うこと聞かなかっただろう？……それがこのざまだ……大陸側の海だけの戦闘だと思ったのによお、こつちまで潜水艦が来てるなんて話聞いてねえよ……」

船江「……それでも船出してえ奴は、みんな漁業組合抜けてくし……」

島村「放つときや良いんだよ、そういう奴は」

船江「……辞めた奴の船は、壊されるし……」

島村「俺が指示したんじゃねえぞ。誰かが勝手にやってるんだ」

船江「……だから俺も……漁業組合、辞めらんねえし……」

崩れ落ちるように座る船江。春日は離れて、縁側に腰掛ける。

島村「辞めたきや辞めろ」

船江「……金貯めてえんです……普通に家建てて……普通の生

活して……普通に……嫁貰いてえ……」

島村「……んなこと言ったって、俺達の商売は水もんじゃねえか……良いときはいいし、そうじゃねえときもある……魚の群れが何処にあるかで決まるんだ」

風呂上がりの泰江が廊下からやって来る。

船江「昇さん、んなこと言ってるから範子の親に漁師は不安定だって馬鹿にされるんですよ」

立ち止まる泰江。春日がそれに気付く。範子と船江と島村も、それに気付く。泰江は無言で通り過ぎようとする。

船江「……あ、あの、お母さん……そういう意味で言ったんじやないんです……あの……その、本当にすみません……御免なさい……申し訳ありません」

範子「そんなに謝んなくてもいいよ」

泰江は行こうとする。

島村「泰江さんさあ、漁師馬鹿にしてるの？」

立ち止まる泰江。

島村「……ねえ？」

泰江「そうじゃないわよ」

島村「じゃあ何で亮がこんなこと言うんです？」

泰江「あのねえ……良い機会だからお話しても良いかしら？」

船江「はい」

泰江「まず、漁師を馬鹿になんかしていません。そう思ってるんだったらそれは大きな間違いです。確かに、漁師さん

は収入が不安定だからって範子には言ってます。でもそれは間違いじゃないでしょう。私が嫌なのは、あなた達は少し閉鎖的でしょう？」

島村「閉鎖的？」

泰江「組合辞めた人の船が壊されてる話は私の耳にも入ってます」

島村「組合がなかったら魚の売値だって変わって来るんですよ」

泰江「あなた達は個人事業主の集まりだから、そうなる理由はわからなくもないですけど、こんな小さな島の、小さな組合でイザコザ起こしてどうするの。もっと私達は助け合わなきゃならないんじゃないの？」

島村「だから、みんなで協力し合って漁師の生活を守るのが、組合なんだよ。それを辞める方が勝手なんだ。和を乱してるんだ」

泰江「それは、あなたの器量の問題でしょう、昇。取りまとめるのはあなたなんだから、独立するだかんだか知りませんけどねえ、こんな小さな島で横の繋がりが持てないんじゃないや話になりやしないわよ。結局そういうことが重要だと思いますけど。そうじゃない？以上」

泰江は台所へ行き、冷蔵庫から水を取り出して、リビングへ行って飲む。

国彦「……昇さん、すみません、母が。いつもあんな感じで」

島村「知ってるよ……お前が生まれる前から」

国彦「母が言ってるのは、コミュニティの問題です」

春日「コミュニティ？」

国彦「今全国的に、農家や漁師はそれだけで生活していくのが難しくなってる、昔からあったコミュニティが崩壊しつつあります。本土の商店街も、シャッター降りてる所が多いですからね。そういった、自分の生まれ育った土地を離れたくないと思う人間には、容赦ない現実が待っています。それでも、慣れ親しんだ場所や友人が多くいる場所にいたいと願うのは、当然です。母は、厳しい現実があったとしても、最終的には情が勝ると言いたいんですよ」



島村「……」

少しの間。

範子「上行こう」

船江「……」

範子と船江は二階に去る。お勝手口のところから、椿がやって来る。椿はお勝手口からメールしながら庭に抜ける。国彦の携帯にメールが来る。国彦はメールを確認する。国彦は庭を覗く。島村は携帯を見て、持って来た紙袋を持って去ろうとする。

国彦「昇さん」

島村「うん？」

春日は何となくそれを見ていて、縁側に向かう。

庭から椿がやって来る。春日が庭を見る。

春日「……あれ？……ゆかりちゃん？」

椿「ああ、はい」

春日「帰って来てたの」

椿「はい」

春日「いつ？」

椿「三ヶ月程、前に」

春日「あ、そう」

島村「何だよ」

国彦「ちよつとこっちで」

島村「俺忙しいんだよ、子供に会うから」

国彦「ちよつとだけ。お願いします」

島村は渋々に庭に出る。椿は会釈する。春日は本を読む。

島村「どうした」

国彦「島が独立するでしょう。ゆかりちゃん、本土に帰るって」

島村「……そうか。やっぱそうだよな」

椿「お婆ちゃんいるし。ほっとけない」

島村「折角、島に戻って来たのにな」

椿「しょうがないよ。戦争あったんだもん」

島村「わざわざそれを言いに」

椿「もう会えないかもしれないから」

国彦「そんなことないよ。一旦本土に戻って、ビザを貰えば、また島に戻って来れるんだし」

島村「まあ、頑張れ」

椿「うん」

島村「じゃあな」

島村はお勝手口の方から去る。応接間に大作がやって来て、ライターを探す。国彦が庭から声を掛ける。

国彦「父さん」

大作「うん？」

国彦「ほら、こちら、前に話した、椿さん」

椿「椿です」

大作「……ああ、戻っていらっしやっただんですってねえ」

椿「はい」

大作「今はどちらで何を」

椿「前と同じです。ダイビングのインストラクターを。たまに、ホテルのお土産屋にも出ています」

大作「そうですか」

国彦「話があるんだけど」

大作「後でな。今仏壇の火が切れてて」

国彦「それどころじゃないんだ。島が独立する話、島民たちに知られてるみたいなんだけど」

春日「え」

大作「そんなはずないだろう」

国彦「ゆかりちゃんも職場の人から聞いたって」

椿「そうなんです」

大作「何で。役所の人間には口止めしたよな」

椿「ホテルの従業員で本土出身者は、優先的に船と飛行機を手配出来るように、先に教えてもらったんです」

国彦「(i.p.a.d.を見せて)それでチケットを予約しようと思っただけ、見てよ、今月の最後一週間の飛行機と船がもう全部満席だ」

春日「(もそれを見て) ああ、本当だ。マズいねえ」

大作「飛行機は30人くらいしか乗れないからなあ」

椿「急に引っ越せと言われても準備がありますし、これ以上

前だとちよつと厳しいんです。本土へ行く便は増えたりしないんでしょうか」

大作「いやあ、それは本土の企業が考えることですのでね、私どもの意向では何とも」

春日「この話、どなたに聞いたんです」

椿「議員の貞升さんが、気を利かせてくれて、本土の人間に優先的に連絡をしたそうです」

大作「いますよ、今」

春日「ちよつと聞いて来る」

大作「ああ、御免、これ持っていて」

春日「はい」

と、春日はライターを持って去る。

国彦「大型船も一杯だなんてありえないよ。来週くらいに一度部屋を探しにいつて、月末に引越したいって言ってるのに、これじゃあ行けないじゃない」

椿「何とかありませんか」

大作「島出身者より本土出身者を優先するよう言ってみましょう」

国彦「本当大丈夫だね」

大作「いやあ、本土出身者なんですから、本籍がある本土に帰るのは当然ですよ」

椿「ありがとうございます」

貞升と春日がやって来る。

貞升「島長」

大作「ああ、貞升さん」

貞升「春日さんに伺いました。島の独立話は、まだ内密な案件だったんですか」

大作「そうですよ」

春日「いや、だけど鳴海社長や磯辺先生も、そんなの聞いてないって」

貞升「先程のお電話ではそんなことは仰っていませんでしたが」  
大作「……ああ、役所の人間には口止めたのに、議員には口止めし忘れたかも」

春日「んもう」

国彦「何やってんだよ」

貞升「本土への便、何とかありますよね」

大作「ええ、何とか、やってみます、はい」

貞升「御免なさい。私のせいでご心配をおかけいたしました。ホテルの方にもそうお伝え下さい」

椿「はい」

廊下から泰江が椿を見る。それに気づく国彦。

国彦「行こう」

椿「あ、では、宜しくお願いします」

大作「はい」

椿「失礼します」

椿と国彦は去る。貞升の携帯が鳴る。

貞升「(電話に出て)もしもし……はい……ええ……そうなんです。大変なことになりました……」

貞升は去る。泰江が応接室に入る。

泰江「ちよつとちよつと、今の、昇の」

大作「ああ」

大作は去ろうとする。

春日「あれ、こつちで話すんだよね」

大作「今、磯辺先生がいらつっしやつたから。鳴海社長、仏壇を相当気に入つて下さつてるよ(と笑う)」

春日「程々にしてよ」

大作「わかつてるよお」

大作は仏間に去る。

泰江「どういう神経してんだか」

春日「ちよつかい出した昇が悪いんだよ」

泰江「まともな神経を持ちあわせていたらねえ、この島に戻つて来ようなんて思わないよ」

春日「都会人はそういうの気にならないっていうじゃない。マシヨンの隣の住民もよく知らないっていうしさあ」

泰江「都会の生き方なんか知らないわよ。ここは島なのよ」  
島村が戻つて来る。

泰江「あの女、戻つて来てるじゃない」

島村「え？」

春日「ゆかりちゃん」  
泰江「まだあの子と？」  
島村「もう終わってるよ。二年も前の話しねえでくれよ」  
泰江「何しに来たの」  
島村「おたくの息子が呼んだんだよ」  
泰江「……国彦が？」  
島村「よく本土に出張で出かけるだろう。あいつも海潜るじゃねえか。で、本土のダイビングのショップに寄ったら、そこで働いてたんだってさあ」  
春日「そう」  
島村「で、半年くらい前か、ゆかりが島に戻りたいって言うてるって国彦から連絡があって」  
泰江「国彦にも、あんな子と口なんか聞くなって念をおしとかないと」  
島村「辞めてよ。本土の人間だよ。島に友達だって少ねえんだから」  
泰江「あの人のせいで、あなたの家庭はどうなったの」  
島村「……」  
春日「……大作さん遅いな、いつまでくつちゃべってるんだ」  
春日「……春日は去ろうとする。千佳が庭にやって来る。島村が持っていた紙袋を持っている。」  
春日「……（千佳に気付いて）……あ」  
春日「……（千佳は会釈して仏間に去る。）」  
千佳「あんな、何やってんの？」  
泰江「え？」  
島村「何が？」  
千佳「（紙袋からグローブを出して）これ」  
島村「……」  
千佳「私に黙って陽平と会わないで」  
島村「陽平が会ってえって言うから」  
千佳「こんなものであの子のご機嫌伺おうなんて見え透いたことしないで」  
島村「お前がいい加減なことを吹き込むからだろう」  
千佳「何？」

島村「俺が、お前と陽平を捨てたって」

千佳「事実でしょう」

泰江「ちよっとちよっと、千佳ちゃん。気持ちにはわかるけど、昇より陽平君の気持ちを考えてあげたら」

島村「ですよねえ。子供が父親に会いてえのは当然だろう」

泰江「馬鹿、あんたがなにもかも悪いんだよ。このおたんこなす（と島村を叩く）」

島村「いって」

千佳「あの、これ。貞升さんにお渡ししていただけですか」

と千佳は泰江に書類を渡す。

泰江「なあに？」

千佳「シングルマザー支援の会の書類です。補助金が出るよう議会で話して下さいるそうで」

泰江「貞升さん、立派よねえ」

千佳「助かってます。女独りで働いても、所得なんてたかがしれてますから」

泰江「知ってる？あの女」

千佳「……ええ……こないだ、スーパーでお見かけしました」

泰江「よくもまあ、あなたが働いてるところにいけしやあしやあと買い物に行けたもんねえ」

千佳「知らなかったんですよ。離婚して、私があそこで働いているの……すみません、お邪魔しました」

千佳、去ろうとする。

島村「再婚すんのか」

千佳は立ち止まる。

泰江「……え？」

島村「陽平が聞いて来たんだよ」

千佳「……で、何て答えたの」

島村「さあ。多分するんじゃないかかって言つといた」

千佳「……そう」

泰江「……まあ、幸せになってくれるなら、それに越したことはないけどねえ」

島村「俺はあいつ、いけすかねえけど」

泰江「聞こえるよ。今いらっしやってるんだから」

千佳 「あんたよりはずっとまし」

泰江 「あの人も、若いときに奥さんに先立たれたからねえ……  
うん、再婚同士、丁度いいわよ」

庭に国彦とゆかりがやってくる。千佳、立ち止まる。

椿 「……あ」

椿は会釈をする。

千佳 「……（泰江に）じゃあ」

千佳は去ろうとする。

椿 「あの」

千佳は去る。国彦と椿は応接室の前に来る。泰江は  
不服そうに座る。

島村 「おう」

椿 「久しぶり……（泰江に）こんにちは」

泰江 「……」

国彦は応接室に上がり、ゆかりが忘れていったもの  
を取るとゆかりに手渡す。

国彦 「はい」

椿 「ありがとう。じゃあ」

国彦 「うん」

椿は去ろうとする。

泰江 「お待ちなさい」

椿 「……はい？」

泰江 「今後、二度とこのうちに来るのはやめて下さる。それか  
ら、うちの息子と話すのもです」

国彦 「母さん。僕の自由だろう。御免ね」

椿 「ううん」

泰江 「何しに島へ戻って来たんです」

国彦 「島が好きで、本土からわざわざ移り住んでくれたんじや  
ないか。島の人間として歓迎するべきだ」

泰江 「本土の方が生活しやすいでしょう」

椿 「今本土では、海が好きで島に移り住む人が増えているん  
です。理由はいろいろありますが、私の場合、人間関係  
に疲れてしまっ」

国彦 「彼女、この島に癒しを求めて来たんだ」

泰江「あんたは高校も大学も本土だったから、本土の人間にかぶれてるのよ」

椿「私は……この島の海が好きで戻って来ました。それがいけないんでしょうか」

泰江「人を不幸にする人間には、この島にいてももらいたくありません」

国彦「彼女は知らなかったんだ。昇さんが結婚してるって」

泰江「そうなの？」

島村「いや、独身の方がモテるかなって思ってた」

泰江「だからあんたはおたんこなすなのよ」

島村「それは、泰江さんの方だよ」

泰江「何が」

島村「お前、言ってるねえの」

国彦「父さんには言った」

泰江「何、何なの」

国彦「実は今、彼女と付き合ってるんだ」

泰江「はあ？……嘘よね」

椿「本当です」

泰江「ふざけないで。どうしてこの子なの。他にもっといい子がいるでしょうが」

国彦「そんなこと言ったって」

泰江「許しませんよ。あなた、今すぐ島から出てって下さい」

国彦「……（溜め息）だから、言いたくなかったんだ」

椿「……ええ、そうするつもりです」

国彦「ほっといてもそうなるから。島が独立するんだ。彼女は本土の人間だから、帰るよ」

泰江「ああ、でしたら結構です。もう何も言うことはございません」

椿「……昇さんのご家族にご迷惑をおかけしたことは、申し訳なく思っています。憎まれて当然かもしれません、でも話せば、そのうち皆さんにも理解してもらええると思っていました」

泰江「お帰り下さい」

国彦「母さん」



椿 「……失礼します」

椿は去る。国彦も追いかけて去る。

島村 「何もそこまで言わなくても」

と、島村は寝そべる。笑いながら、大作と春日に連れられて、貞升と磯辺、鳴海がやって来る。

大作 「さあさあ、どうぞどうぞ」

貞升 「失礼します」

島村 「あ（と起き上がる）」

大作 「あ、こちら、漁業組合長の島村です。議員の元組合長が来れないっていうんで、代理で来てもらいました」

貞升 「島議会議員の貞升です」

島村 「島村です」

貞升 「宜しくお願いたします」

泰江 「あなた、ちょっと」

大作 「うん」

泰江 「国彦のことで」

大作 「何だよ」

泰江は廊下に行く。応接間に磯辺がやって来る。島村と目が合う。

磯辺 「あ（と会釈する）」

島村 「（会釈を返す）」

大作 「あれ、磯辺さん、昇は初めて」

磯辺 「ええ、実際にお話しするのは。はじめまして。島議会議員の磯辺と申します」

島村 「どうも」

大作 「後、鳴海さんも、議員のお父様の代理で来ました」

泰江 「あなた」

大作は廊下に出る。台所で泰江とここそ話す。春日が座布団を持って来る。

春日 「どうぞ」

貞升 「あ、ありがとうございます」

磯辺 「失礼します」

と貞升と磯辺は座る。

大作 「知ってたよ」

泰江「何で黙ってたの」

大作「お前に言うともたガミガミ言うから」

泰江「そんな大事なことに親に黙ってる方がおかしいわよ」

大作「知らん、お前そんなことでいちいち呼ぶな」

泰江「待って。あなたからも反対だって言っつてよ国彦に」

大作「今そんな話してる場合じゃない」

泰江「んもう…」

と、大作は応接室へ向かう。

大作「すみません、お待たせしました。これで皆さん、揃いました。まずは独立に向けて島の憲法を作りたくので、皆さんのお力添えを賜りたいと存じます。えーと、じゃあ、学校の先生だった磯辺さん、お願いします」

磯辺「はい。実は、島長から指示をお受けいたしましたので、まあ、大学で法律の勉強をしていたこともあり、僭越ながら私が資料を作らせていただきました。まずはこちらをご覧下さい」

と、磯辺は紙をまわす。

磯辺「私はやはり、本土の憲法をベースに考えて行った方がいいと思いますが、まずは、主権を何処に定めるかを決めた方が宜しいかと」

島村「主権て？」

磯辺「今は国民にあります。独立後の島も、島民に主権があるのかどうか、まずはこれを話し合いたいと思います」

春日「島民以外に、主権なんてありえるの？」

磯辺「まあ、殆どありませんが、一部、独裁政権国家などもありますので」

大作「では、主権は島民にある、このお考えに反対意見の方はおられますか？」

春日「意義なし」

鳴海「異論ありません」

貞升「私も」

磯辺「同じく」

大作はメモを取ろうとして、止まる。

大作「…昇は？」

島村「俺は納得いかねえなあ」

大作「え？」

磯辺「何故です？」

島村「いや、元学校の先生だからって、はいはい聞くのはどうかと思うよ」

鳴海「だけど、今時民主主義国家じゃない国なんて、周りから笑われてしまいますよ」

島村「そういうもんですか？」

貞升「他に、何かいい案がございますか？」

島村「いや別にございませんですけど……社長がそう仰るなら、俺も賛成でいいです」

大作「まあ、これは当然ですね……で、次は？」

泰江が茶を持って来て配す。皆、適宜会釈をする。  
終わりに次第、泰江は台所へ行く。

磯辺「議会と司法、行政についてですが、現状は島議会で立法し、行政が役所、司法は裁判所です。これも現行と同じで良いかと思えますが、いかがでしょうか？」

大作「反対の方は挙手を……いませんね。これも現行のものを踏襲すると。で？」

島村「ちよっ、ちよっと待ってよ」

春日「何だよ」

島村「島のことって大切な話でしょ。こんな簡単に決めちゃつていいの」

鳴海「いいんですよ」

島村「何かを変えることがあれば今がチャンスだろう」

磯辺「その通りです」

春日「その、チャンスって言い方がいい加減だよお前」

大作「良識ある磯辺先生が作って下さった書類だぞ。間違いないんてことがあるかお前」

貞升「あの、島長、宜しいですか」

大作「ああ、どうぞ」

貞升「私は島村さんのご意見を尊重したいと考えます」

春日「昇の言うことはあてになりませんから」

島村「何だよそれ」

貞升 「結局、今回の本土の一件はですね、行政に対して議会と司法が機能しなかったことに問題があると思うんです」

大作 「と、申しますと」

貞升 「戦争は明らかに憲法違反です。どうして国会や裁判所が内閣を監視出来なかったんでしょうか」

磯辺 「要するに、三権分立が上手く機能していないと」

鳴海 「国会は内閣に何も出来やしませんよ。圧倒的多数の与党がふんぞり返っている間は、どんな悪法でも可決しちゃうんですから」

貞升 「裁判所は何か出来ないのでしょうか」

磯辺 「憲法や法律が違反していないか、審査する権限はありません」

貞升 「どうしてそれを行わないんです」

磯辺 「国会の裁量の範囲に属するものや、高度に政治的な行為は審査されません」

春日 「安全保障は、高度に政治的な案件ですもんね」

島村 「それじゃあ意味ねえじゃねえか」

磯辺 「いちいち裁判所にお伺いをたてていると、政治が前に進みませんからね。それに、行政行為の訴訟を起こすには、実際に損害を被ったという具体的な事例が必要です」

島村 「おかしいよ、そりゃ」

磯辺 「司法は、基本個人の訴訟を扱います。これを主観的訴訟と言います。こないだ本土で、ミサイルの被害に遭われた方々や大陸で戦死した兵士達のご遺族が訴訟を起こしましたでしょう。あれです」

貞升 「人が亡くなってからでないと、戦争が正しかったかどうか審議出来ないなんておかしいです」

鳴海 「どうせ、国は正しいと言うに決まっていますよ」

貞升 「ですが、そういったことなかれ主義が日本を再び戦争に導いてしまった要因なのでは？」

鳴海 「いや、理屈でどうこう言ったって変わりませんよ。人間には感情というものがありますでしょう。ミサイルが落ちて死者が出たら、報復したいと思うのは当然ですよ」

貞升 「本土は専守防衛が基本理念です。それなのに本土の兵士

は大陸に派兵され、他国の軍隊と一緒に戦闘を行いました。こんなことが許されますか」

鳴海「国民感情はとめられませんよ」

大作「派兵には、例の、安全保障のあれを適応したんですよ」

春日「戦争は憲法違反だけど、他国の軍隊との攻撃はあれで出来ちやうんだから。やっぱり違和感あるよねえ」

貞升「あれだって、国会で憲法違反だと認められたのに、可決したんですよ。これでは何が重要で、何を基準に生きていけばよいか、わからなくなります」

磯辺「一応、司法ですね、主観的訴訟とは別に、客観的訴訟というものがあります。国民が地方自治体などに、違法行為の是正を求めるものです」

貞升「いいじゃないですか」

大作「あつたんですねえ、そういうのが」

磯辺「他にも機関同士の訴訟というのがあつて、自治体と国が争うといったようなことも可能です」

島村「んも、先生の話は難しくてわかんねえよ」

鳴海「要するに、この島に基地を作れと国から言われたら、島で国を訴えることが出来る訳です」

島村「ああ、成る程。わかりやすい。流石社長」

貞升「それは素晴らしい権利じゃありませんか」

鳴海「だけど、そんなことを許したら、何も出来なくなりますよ」

磯辺「ええ、ですから一定の場合のみで、本土では、原則として認められていません」

鳴海「そりゃあそうですよ。今は憲法を作るのが優先ですから、そういったことはあれです、細かい法律を作るときに、詳しく話し合ったらどうですかねえ」

大作「ああ、確かにそうですね。いかがでしょう。この件は、また後日話すということでは」

貞升「わかりました」

大作「では、議会、行政、司法も現行の憲法を踏襲する、というところで宜しいですかね。ただし、司法が政府や議会な

どへの監視機能を充実させるということ。異論はありませんか」

鳴海「はい」

島村「異議なし」

春日「いいと思います」

皆領いたり、適宜返事をする。

大作「はい、決まりと。で、次は」

磯辺「後は、戦争と、軍隊の保持についてですが」

鳴海「いや、戦争はしないってことでいいんじゃない？」

春日「当然でしょう」

島村「だけど、軍隊も何も持たないってのは危なくないすかねえ」

貞升「私もそう思います。独立したら、戦争をしかけられる可能性だってあるんですから」

大作「流石に戦争はしかけて来ないでしょう。こんな島に戦争しかけたって、メリツトなんてないんですから」

鳴海「同感です。島の資源は、海産物と温泉くらいなものですよ」

貞升「ですけど、万が一のことを考えておいた方が宜しいのでは？軍隊も何もなかったら、攻められた時、簡単に負けてしまいます。こちらから戦争を仕掛けるなんてことは考えておりませんが、島が他の国に占領されるのは、皆さんだってお困りになるはずですよ」

磯辺「つまり、戦争をこちらから仕掛けることはしないが、防衛軍のようなものは必要だということですか」

貞升「はい。私達の島なんです。これからは私達自身で守らねばなりません」

島村「俺も賛成だな」

鳴海「私は戦争には反対ですし、当面は防衛軍も必要ないと考えます」

貞升「ですが、いつ他国が攻めて来るかわかりませんよ」

春日「確かに防衛は大事ですけどね。この島の財政だけじゃあまともな軍隊なんて作れませんよ」

鳴海「そうそう、そうですよ」

春日「武器って高いんでしょう？よくは知りませんが」

鳴海「高いですねえ、ええ」

島村「だけど、守ってくれる人がいねえと、俺らも安心して船出せねえよ」

貞升「そうですね」

大作「今この状況で、何処かが攻めて来るってことはないだろう」

島村「海上保安庁の船くらいは用意しようよ」

大作「あの、射撃出来る奴か」

島村「あれがなかったら、外国の漁師たちは島の海域で密漁しまくりだよ。海域の魚は俺達の財産なんだから」

貞升「ええ。多少の武力は持つておく必要があると思います」

大作「うーん……」

鳴海「密漁船が来たら、口頭で伝えたらどうです」

島村「社長、それでいうこと聞くような奴なら、そもそも密漁なんてしませんよ」

春日「だけどな、昇、予算は限られてる訳だから、まずは軍隊についての考えだけを纏めて、実際に作るって話は、お金をかける順序を決めてからでもいいんじゃない？どうかな？」

大作「ああ、成る程、それはいい」

鳴海「ええ、お金がないんですからしかたありませんよ」

貞升「ですが、将来的に軍隊を保持するとして、攻撃されるなどの有事の際は、どなたが指揮をとるか決めておきますか。いつ、何が起きても混乱しないように」

鳴海「今必要ですかね、それ」

貞升「独立後、すぐにミサイルで狙われる可能性だってあります」

島村「そうになったらやっぱり島の長が指揮をとるべきでしょう」

貞升「では取り急ぎ、有事の際は、島の代表者が武力攻撃するかどうかを決定出来るということにしておきますか？」

大作「いやあ、ちょっと待って待って。いや、それはあまりにも責任が重すぎやしないかね、島長の」

貞升「ですが、他に適任者はいないと思います」

大作「私の責任で武力攻撃するかどうかなんて決められないよ。攻撃したらまたやられるでしょう」

磯辺「まあ、普通はそうですね」

大作「そんなの駄目駄目、みんなの命がかかってるんだから」

貞升「島が攻められたら戦うしかありませんよ」

大作「戦うたって、武器を買うお金がないんじゃないか竹槍で抵抗するって訳にもいかないでしょう」

貞升「はい？」

島村「竹槍って」

磯辺「島長、何を仰ってるんですか？」

大作「だって買うお金ないんだからさあ……いや、そのときは、明け渡すか」

島村「は？」

貞升「島を守らないおつもりですか」

大作「明け渡そうよ、死人を出すくらいならさあ」

磯辺「私達の領土ですよ」

鳴海は拍手をする。

鳴海「素晴らしい。島長、今はじめて島長らしいこと言いました」

大作「（小声で）え？はじ、はじめて？」

鳴海「そもそもですね、防衛軍のようなものを持つという前提で話が進んでいたのが気になっていたんですが、私はいらないと思いますよ」

磯辺「社長のお考えは承知しました。今問題なのは、有事の際に領土を簡単に明け渡すと仰った島長の御発言です」

大作「あ、そんなに問題ですか？じゃあ、撤回しようかなあ」

鳴海「いえ大丈夫ですから」

大作「そうですか」

鳴海「第一、こんな島に戦争を仕掛ける国なんてありませんよ。現実問題として」

島村「いや、わかりませんよ」

鳴海「こんな島を攻めて、何の得になるんです？」

島村「島じゃねえんです」

春日「え？」



島村「ここを攻める目的は、土地じゃなくて、海ですよ」

大作「海？」

島村「海域です。みんな知らねえかもしんねえけど、海域ってすげえ大事なんだよ。島は小せえけど、取り巻く海までが領土って考え方らしいんだよ」

磯辺「排他的経済水域というものですね」

貞升「ええ、そこから他国の船や戦闘機が入って来た場合は、領土領空侵害というものになります」

島村「そうそう、200海里ね」

大作「海にそんなに価値があるのはマズいよなあ、島は海だらけだよ」

島村「だから、危ないっていつてるんでしようが」

鳴海「だけどね、よく考えてみて下さい、海域を取り合うのは隣接した国家の場合が殆どです。この島に隣接した国家ってというのは何処です？」

大作「……ああ、本土ですええ」

鳴海「そうです。いいですか、皆さん？本土が自ら切り離れたこの島を、わざわざ占領しに来ると思いますか？そんなに海が欲しかったら、今回の件で、是が非でもこの島を本土の領土としたはずですよ」

磯辺「成る程」

春日「確かに」

貞升「島が攻撃される可能性が少ないのは間違いないでしょう、ええ」

島村「本土の人間なら密漁もしねえだろうし」

大作「だったらですねえ……島の方針としては、やはり戦争はしないと、はっきりと憲法に明記してはいかがでしょうか？」

鳴海「賛成です」

大作「防衛軍の議論もしなければなりません、人もいませなし、お金もない故、当面は島の独立を最優先に考え、頃合いをみて議論しましょう」

春日「大作さんがそうしたいなら、俺はそれでいいと思う」

大作「異論はありませんか？」

島村「ありません」

貞升「ございません」

磯辺「あの」

大作「はい？」

磯辺「それだと結局、島の防衛と、防衛軍の問題を先送りになっています。そこは重要な点ですから、憲法に記載せねばなりません。持つなら持つか持たないか、方針だけでも決めるべきではないでしょうか」

島村「防衛軍は作るんですよ」

貞升「私もそういう認識ですが」

鳴海「いらなと思いますすがね」

大作「春日君は」

春日「だったらあれだよ、本土と同じようにね、憲法には武力や防衛軍の一切を持たないと書いておけばいいんだよ。で、後から作ればさあ」

大作「ああ、それいいねえ」

磯辺「それはいけません」

大作「え」

春日「何で」

磯辺「憲法に防衛軍と武力の一切を保持しないと明記したら、それを守るべきです」

島村「だけど、本土は現に持つてるじゃねえか」

磯辺「それは本土がおかしいんです。一切の武力を保持しないと明記されているのに、事実上防衛軍を容認している状況です。こういった矛盾を憲法上できちんと解決しておかなかったことが、今回の戦争行為を引き起こしたんです」

春日「成る程」

貞升「先程申し上げた、司法の件を付け加えるだけでは駄目なんですか」

磯辺「勿論それはします。私が今話し合いたいのは、我々島民の、独立国家に生きる民全ての、向かうべき理想です。理念です」

大作「うん。どうです、皆さん」

鳴海「島が戦争をすることはありませんよ」

磯辺「ですが、未来の島民が、島だけではやっていけないとなつたときに、領土や資源が欲しくなると思うことはあるでしょう。人は追いつめられると、そういう発想になつてしまうことがあります」

島村「確かに、島に明るい未来なんてねえか」

大作「いや、これからはね、島を本格的な観光地にするつもりだ」

鳴海「ええ。私はね、企業を誘致するべきだと思いますよ。雇用も獲得出来ますし、税収だつて見込めますから」

大作「ああ、それはいい、是非やりましょう」

鳴海「本土に知り合いがいるので、話してみても宜しいですか？」  
大作「是非」

磯辺「その二つは矛盾しています。観光地にするつもりなら、自然を守らねばなりません、企業を誘致したら、折角の島の美しい自然が損なわれるのでは？」

貞升「確かに」

島村「細けえこといなよ先生」

鳴海「君は一体何をどうしたいんだね」

磯辺「どのような平和国家を目指すか、それを話し合うべきです。一つ懸案事項として、島の独立の経緯を歴史的に捉えた場合、未来の島民が本土に対して反感を持つ可能性があります。一つ懸案事項として、島の独立の経緯を歴史的に捉えた場合、未来の島民が本土に対して反感を持つ可能性があります」

貞升「それは仕方のないことじゃございません？」

島村「そうだよ、俺なんて本土に対して憎しみしか湧かねえよ。勝手過ぎるだろう」

磯辺「今回の戦争を思い出して下さい。大陸の国が本土に対して、歴史的観点から反感を持っていました。それが、ミサイル発射を後押ししたんです」

鳴海「ではなくて、本土の同盟国があつた国に制裁を加えたからですよ。とんだとぼっちりだ」

貞升「元々は本土が大陸の国に対して酷いことをしたからです」

磯辺「それで被害を被つたのは誰です？私達でしょう。今は、戦争を知らない世代が世の中を動かしているんです。残

念ながら、多くの命が亡くなりました。折角、憲法を作る訳ですから、私たちはこの戦争での教訓と想いを、後世に伝えていくべきではないでしょうか。未来永劫、人間が過ちをおかさぬよう、何百年、何千年先の平和を見据えた、普遍的な思想を含んだ憲法にするべきです」

大 作 「例えばどんなものですかねえ、具体的には」

磯 辺 「この島は事実上、本土からみすてられた格好になってしまいました。しかし、島の人間は今回の件で本土を憎むのではなく、むしろ友好的な思いを抱くべきであると、そう明記してはいかがでしょうか」

春 日 「……いいねえ、それ。いや、いいよ。そう思わない？」  
鳴 海 「ミサイルを落とされたら、そんな綺麗事だけではすまないでしょう」

貞 升 「ええ、憲法に書いたからといって、本土に反感を持つなと強制出来ないのでは？」

島 村 「そうだよ。個人の自由ってそういうことじゃねえのか、よくわかんねえけど」

磯 辺 「だからこそ、感情に流されない為に、憲法の文言が重要だと申し上げているんです」

鳴 海 「いや、それは理想論です。何千年先の島民のことより、私は今現在の島民の生活を第一に考えるべきだと思いますがね。亡くなった者は偲べばいいんです、これから生まれて来る者は見守ればいいんです、しかし、今生きている者達を尊重しなくて、何の為の憲法なのですか？私はそんな風に思いますかねえ。違いますか？」

貞 升 「私も賛成です」

鳴 海 「そうでしょ？」

磯 辺 「それはあなたのいう事なかれ主義とは違うんですか」

貞 升 「私は島新聞に勤めておりましたが、政治にしても経済にしても、成功を収めている方はどなたも、世の中を正しく評価する目を持っておられます。何百年先のことはわかりませんが、その時代の知識人たちの目を、信用するべきだと申し上げているんです」

磯 辺 「憲法は、その国の基本理念です。一度制定したら、そん

な簡単に変えていいものではないと思います」

鳴海 「あなたはね、何というか、視点が宇宙的すぎるんです。遠くばかり見つめていても、足元の何かにつまづいて転んだら意味がないでしょう」

貞升 「磯辺さんは憲法というものを神格化しています。若干認識がおかしいのでは？」

磯辺 「極めて一般論を述べているつもりですが」

貞升 「こうなった経緯は本土の政府に問題がある訳ですから、島がみすてられたと、島民がそうはつきりと認識しておかなければ、今後何かのときに本土に賠償などを請求出来ませんよ」

鳴海 「ああ、賠償ですか。成る程、その手がありましたねえ島長」

大作 「え？ええ……」

磯辺 「その考えは危険です。今後、本土と島の争いに発展します」

貞升 「本土との関係で優位に立つ為には必要な歴史認識です。島長、島は見捨てられたのだという認識を島の教育として徹底するべきでは？」

磯辺 「そんなの許しませんよ。元教師として言わせていただきますが、それでは豊かな人の精神が育まれません」

貞升 「精神の話ではありません、権利の問題です。権利を主張し続けるべきです」

鳴海 「これからはお金が必要ですよ」

大作 「ちよ、ちよ、ちよ、待って下さい、社長。貞升さんも、島の女性の地位向上を目指して議員になられたわけですから、そう仰りたい気持ちはわかります。ですがね、私は本土に対して賠償を請求することは考えていません」

鳴海 「何故です？」

貞升 「切り離されるんですよ。それなりの保障を支払っていただかなくて。それを島の発展の為に役立てるべきです」

島村 「そうだよ、貰えるもんは貰った方がよくね」

大作 「いや、だけどね、島の道路や港の整備をこれまでに何度も本土の議会にお願いしても、なんだかんだと理由をつ

けられて、全然相手にしてもらえないんですよ。本土だってほら、借金が凄いつていうでしょう。そんな状況で、こんな離島の整備なんかはねえ、結局後回しになるんですよ。ただでさえこんな状況ですよ、他の国になったら余計お金なんて、ねえ」

鳴海「ああ、言われてみれば、そうですねえ」

春日「考えてみれば、こんなことになる前から、この島はみすてられてるような存在だったって事だ」

貞升「ですが、それで賠償請求をしないのは、お人好しすぎませんか？」

磯辺「品格があると仰るべきです」

貞升「島長が仰ったように私達島民の主張は元々通らないんです。離島の住民は弱者です。弱者が品格なんていつていられませんか。弱者は主張を続けるべきです」

大作「貞升さん、そんなのはねえ、本土の政府にとつては関係ないんです。人間てのは憲法上、平等のはずです。他に困っているところがあるからそこから先にと、これが向こうの言い分なんです。そういわれたら何も言えないでしょう」

島村「憲法に平等って書いてんのは、結局俺達に文句を言わせねえ政治家の常套句ってことか。実質不平等なのが社会だもんなあ」

春日「だけど、憲法は政治する側の人間の為にあるんじゃないくて、民衆一人一人の権利を守る為にあるって、本に書いてあるよ」

島村「何も守られてねえじゃんよ俺達。で、仕舞いには独立しろってか。ふざけんじゃねえよ」

磯辺「……あ、でしたらそれをすね、私達がこれから作る新しい憲法に明記して、改善していけば宜しいんじゃないでしょうか」

春日「あ、弱者に優しい国家かあ……いいね、それ」

大作「うん、私もそう思います、いかがでしょう皆さん」

鳴海「異論ありません」

島村「俺も」

大作「貞升さんは」

貞升「何と云うんでしょう、それが出来るんでしたら、そもそも平等という言葉にこれほど苦しめられることはなかったと思いますか」

磯辺「わかります。ですが独立したらこの島自体がですね、国際社会の中で弱者になるわけですから、我々がいかにして平和的に他国と共存出来るか、それを模索する上でも弱者に優しい立場に立つというのは、重要な論理です」

大作「つまり、新しい独立国家は、内政的にも、外交的にも、弱者の立場に基づいて、平和と平等を求めると、こういうことですか」

磯辺「これを、島の憲法の大きな柱の一つにするんです」

春日「いいじゃない、ねえ」

島村「うん」

貞升「そんなことが可能でしょうか」

鳴海「はい？」

貞升「それをどうすれば実現出来るのか、もっと具体的に説明して下さい。」

磯辺「国家の規模はより小さくなる訳ですから、住民一人一人の意見は前よりも通りやすいはずですよ。それが小規模であることの数少ない利点だと考えます」

貞升「内政に関してはそうかもしれませんが、でも外交の問題はどうなります。私達がいくら平和を唱おうと、軍事的には圧倒的に不利な訳ですから、こちらの論理なんて通用しないんじゃないやしません。軍事的に有利な国々と、どうやって互角に渡り合っていくんですか」

磯辺「貞升さんは先程、弱者は主張し続けるべきだとおっしゃいました。島長も、武力行為で死者が出ることをこの上なく嫌っておいででした。それらを踏まえるつまりこういうことになります。新しい憲法では、平和国家を目指し、人命の安全を最優先にします。それでも万が一、他国との軍事的衝突の可能性がある緊張状態が生じた場合には、我々島民は、武力の代わりに、言葉で対抗措置を執るのです」

大作「言葉で」

磯辺「はい。言葉による平和的解決を最終的な外交手段とする  
と、憲法にそう明記するというのはいかがでしょうか」

貞升「言葉による平和的解決、ですか」

春日「成る程、言葉が我々の武器になるってことですね」

磯辺「ええ」

鳴海「正にそれですよ。島の財政を考えると軍事費など到底捻  
出出来ないでしょう。わたしがさつき防衛軍は出来ない  
って言ったのはねえ、つまりそういうことなんですよ」

磯辺「いかがでしょう島長」

大作「ええ、問題ありませんよ。言葉なら、いくら喋ってもた  
だですしねえ」

島村「本当だ、一円も掛からねえや」

春日「じゃあ、防衛軍もいらないうことでもいいのかな」

鳴海「当然そういうことになりませうでしょう。この島は、武力  
の代わりに言葉を用いる訳ですから」

磯辺「ええ。武力を持った時点で、それは憲法違反になります」

大作「いいですね。私は賛成ですが、皆さんいかがでしょう」

鳴海「問題ありません」

島村「異議なし」

春日「賛成」

大作「貞升さんは」

貞升「……ええ、……それできっと、……素晴らしい憲法にな  
ると信じましょう」

鳴海「島長、纏めましょう」

大作「はい、えー、新しい憲法では、平和国家を目指し、防衛  
軍及び武力の保持は、一切これを放棄する。また、内政  
的にも、外交的にも、弱者の立場に立って物事を鑑み、  
平和的かつ平等な国づくりを目指します。ただし万が一、  
緊張状態が生じた場合は、他国でいうところの武力にあ  
たるものとして、この島では言葉を最終的な外交手段と  
して採用し、島民の人命を守る為、平和的解決を行う対  
抗措置を執る。以上の内容で新しい憲法の草案を作成い  
たしますが、皆さん宜しいでしょうか」



島村「異議なし」

春日「異議なし」

鳴海「異議なし」

磯辺「異議なし」

貞升「異議なし」

鳴海「（時計を見て）今日は、このくらいにしませんか」

春日「そうですね」

島村「疲れた」

大作「では、続きは明日以降ということで。お疲れさまでした」

鳴海「お先に失礼します」

磯辺「お疲れ様でした」

と大作と春日は鳴海は廊下に行く。

泰江「ああ、どうも、ご苦労様でした」

鳴海「お邪魔しました」

春日「どうも」

島村「泰江さん、また」

泰江「はい」

島村は庭へでて自転車を持って来る。春日と鳴海は玄関に去る。大作もそれを見送る為に去る。貞升が廊下に出る。泰江は貞升に声をかける。

泰江「ああ、貞升さん」

貞升「はい」

泰江「これ、お隣の千佳ちゃんから預かってます」

と貞升に書類を渡す泰江。

貞升「ああ、はい」

泰江「どうも、ご苦労様でした」

貞升「失礼します」

貞升は去る。応接室では磯辺と島村。

島村が自転車で去ろうとして、磯辺が声をかける。

磯辺「島村さん、ちよつと宜しいですか」

島村「……」

磯辺「もっと早くご挨拶しようと思ったのですが、なかなかお会い出来ず、遅くなってしまうました。実は今、千佳さんとお付き合いさせていただいています」

廊下から泰江がこの会話を聞いている。

島村「挨拶なんかいいんですよ。もう別れてるんで」

磯辺「ですが、陽平君のこともございますので、一度ちゃんとして挨拶したいと思っただけなんです」

泰江が廊下から応接室に入ってくる。

磯辺「まだ独立の件は話していませんが、千佳さんは陽平君を本土の学校に行かせたがっているので、二人とも本土に行くことになるかもしれません。もしそうなったとしても、私に出来ることは何でもさせていただくつもりです」

泰江「……ほら、向こうがちゃんとご挨拶してくださいさっさとしようが」

間。島村は自転車を降り、応接室に正座する。

島村「……駄目な父親でしたが、どうか、息子を可愛がってやってください。よろしくお願いします」

磯辺「承知しました」

島村は庭に出て、自転車で去る。国彦が庭から戻ってくる。

磯辺「では」

磯辺は去る。国彦は縁側から応接室に上がる。二階から、範子が降りて来る。

泰江「あの人だけは許さないよ」

国彦「僕の人生だ。母さんのじゃない」

泰江「国彦」

大作が応接間に戻ってくる。本などを整理し始める。

国彦「母さんのそういう態度が、島をよくないところなんだ」

泰江「何が」

国彦「その、排他的で醜い島国根性だよ」

泰江「排他的じゃないの。島の安全を守る為に言ってるのよ」

国彦「何処が安全を守ってるの？島の人間の心の貧しさを晒してるだけじゃないか」

国彦「彼女がいたら、安全じゃないっていうのか」

泰江「不倫するような人間は駄目よ」

国彦「誰でも間違える時はある。人間はそんなに簡単じゃないだろう。きっと母さんのような人間が、戦争を引き起こす

んだ」

泰 江「何それ、どういう意味」

国 彦「人間は何故間違ってしまうのか、僕たちはその理由を見つめるべきだ。考えるべきだ。それをしないで、ただ間違う人間は悪だと言ってるだけじゃ、また同じ過ちを繰り返してしまふよ」

泰 江「戦争する人間は最低よ」

国 彦「僕らの国が戦争に参加したんだ。大陸に兵士を派兵して、武力行為を行ったんだ。それでも母さんは戦争と関係ないっていいのかい？」

範 子は応接間を覗く。

泰 江「私は戦争なんかしません。したくもない。あれは向こうが仕掛けて来た戦争よ」

国 彦「それはいいの？僕らの国だって、大陸の兵士たちを殺したじゃないか。あまり報道されなかったけど民間人だつて殺したじゃないか。僕らの国はよくて、どうして大陸の国だけが悪いんだ？それが排他的で醜い島国根性だつて言ってるんだ。不倫も、ミサイルも、結局は人間がやることだろう？だからね母さん、人間というのはきつと、本来間違ってしまう生き物なんだ。僕らは、間違っしまふ人たちを否定しちゃいけない。理解してあげるべきだ」

泰 江「……」

大 作「あれだな、自分が正しいと思つた時点で、敵を作るのかもしれない。いや、敵がいるから自分が正しいと思うのか、どっちが先かわからんが」

範 子「お兄は独身だよ。別に悪いことしてない」

泰 江「……二人とも、どうしてまともな人を好きになつてくれないの。育て方を間違つたのかしらね」

範 子「彼はまともだよ」

泰 江「何処が？魚で私の機嫌とろうなんて。そういうのはね、精神が卑しいっていうんです」

大 作「辞めないか、ピーチクパーチク」

範 子「お母さん、言い過ぎ」

泰 江「何が？」

範 子「彼にだってお母さんの知らないいい所沢山あるんだから」

泰 江「あなたの目は信用出来ないの」

範 子「またそれ？お母さんは誰を連れて来ても文句を言うのよ」

泰 江「そんなことないわよ」

範 子「そうでしょう？私が好きになった人だよ？彼のいいところを見ようとするのはお母さんの方じゃない。お母さんが信用していないのは、彼じゃないの。私よ。私とお兄なの」

泰 江「……」

間。大作は、廊下の船江に気付く。春日がグラスを持って応接間に来る。

大 作「……船江君だって、よかれと思ってそうしたんだから」  
泰 江「魚で私の機嫌とろうなんて。物事には順序つてものがあるの。その前に私達に言うことがあるでしょう。だまーってすーっとうちに入って来て、だまーって帰るんだから。うちは売春宿じゃないのよ。私はまだあの人の口から、範子と付き合ってますって、一言も聞いてないんですからね」

船江が応接間に入って来る。

船 江「(正座して)……あの……お母様が自分をどういう風に思っているかはわかってるつもりです……だけど……自分……範子が好きです……本気で結婚を考えて、お付き合いさせて戴いてます……大変ご挨拶が遅くなりましたが……今後とも、どうぞ、よろしくお願いします……」  
国 彦「……物事に遅すぎるなんてことはないよ。……少なくとも、僕はそう信じてる……」

船 江「……」

泰 江「(正座して)……そうですか……私も口が悪くて、ああだこうだと言いますけど……あなたがきちんとしてご挨拶してくださいだったので……もう……全て忘れて、範子との付き合いは認めます」

範 子「……お母さん」

泰 江「あなたもいいのね？」

大作「え？ああ、はい、どうぞお好きなように」

泰江「ただし、結婚となると話は別です。もう少し経済力がな  
いと、大事な娘は嫁にやれません」

船江「……はあ」

泰江「こういうのは、あなたからいうものでしょう？」

大作「ああ……まあ、それに越したことはありません、です」

船江「わかりました。考えます」

泰江「以上」

泰江は立ち上がり、応接間から台所へ行くと言蔵庫  
からビールを取り出し、グラスを持って来て応接間  
で飲む。

船江「失礼します」

範子「送ってく」

船江「ああ、いい。では」

船江は一礼して、廊下から玄関に去る。範子もつい  
て行く。泰江はビールを飲む。

泰江「……」

廊下で船江に抱きつく範子。

大作「ちよつと放送屋に行つて来る」

泰江「今から？」

大作「(上着を着ながら)三軒隣じゃないか。島が独立すること  
を放送しないと。もう知っている人間がいるから、不公  
平にならないよにな」

泰江「島長としての仕事より、一家の長としての仕事を、少し  
はしてもらいたいもんね」

大作は廊下に出る。廊下でキスをしている範子と船  
江。

大作「……け、けふけふ……けふけふ」

慌てて離れて玄関に消える、範子と船江。

泰江「なあに、その咳」

大作「いや、一家の長としての仕事を……」

泰江「は？」

大作「何でもない。行つて来る」

大作は玄関に向かう。反対側から範子が出て来て、

大作に向かって笑顔でピース。煩わしそうに、それをかわして大作は去る。範子は二階に上がる。国彦は応接間から出て台所に行き、グラスを持って応接間に来ると、ビールを注いで飲む。

泰江「……いつまでも、子供じやないのよねえ」

国彦「……」

泰江はビールを飲む。

泰江「でも……あんたは駄目よ」

国彦「……」

泰江「別れなさい」

国彦「……彼女にも、そう言われた……ついさっき」

泰江「……そう」

泰江はビールを飲む。

泰江「……で……あんた、なんて答えたの」

国彦はビールを注いで飲む。

国彦「……彼女に、プロポーズした」

時間が止まるように波の音が聞こえる。島の放送で、大作の肉声が拡声器で流れる。

大作の声「えー、島民の皆様、島長の児島大作です。皆様にご報告しなければならぬことが、ございます。今月一杯を待ちまして、この島は本土から切り離され、新たに、独立国家としての道を歩むこととなりました。これまで御島民の皆様方の努力により、この島は発展してまいりました。この度、本土から独立するにあたり、皆様にいくつかご注意願いたい点がございます」

拡声器の音は小さくなる。座り込む泰江。

泰江「……マイクで聞いても、……酷い声」

泰江はビール飲む。

国彦「……」

応接間の国彦と泰江。

彼らの目に映るものは、

希望か……、

絶望か……、

暗転。

大きくなる大作の拡声器の声。

大作の声「本土に行かれる方も、この島の美しい海と山の景色を、どうか忘れないでいただきたい。そして、島にお残りになる島民の皆様申し上げます。この独立は、決して悲観的なものではありません。この島の独立は、我々に島民に与えられた希望なのであります。島を発展させていくためにも、我々島民は、これまで以上に一致団結し、島を発展させてゆかねばなりません……」

## 第二場

舞台は、一ヶ月後の同じ場所。独立前日。リビングに千佳が座っている。千佳は時計を気にしながら、そわそわした様子。応接間には鳴海と大作。

鳴海「いやあ、凄い勢いですねえ」

大作「ええ、役所に聞いたたら、島の人口はもうすぐ1万2千を超えるそうです。本土に行く者が1500人程度って言うてましたから、5千人以上も増えたってことですか」

鳴海「ね？私の言った通りでしょう」

大作「明日は独立記念日ですからね、その前に島に來たい人達つてのがいるんだそうです」

鳴海「ええ、この島で独立の喜びを味わいたいって皆さんそうおっしゃってくれていますよ」

大作「もう住む家がないってくらいですからね。今着工した集合住宅も既に完売らしいですからね。あれからまだ一ヶ月ですよ？」

鳴海「独立以降も島はまだまだ島民を受け容れる訳ですから、もっと人で賑わいます」

大作「いやあ、流石社長です。何と言うか先見の明があるんでしょうなあ」

鳴海「まだまだ、立国物語はこれからですよ」

大作「(笑って)いいですねえ、社長が言えば何でも出来そうな気がしますよ」

鳴海「人が増えたんでね、次は彼等の働く場所を作らなければなりませんよ」

大作「ええ、わかっております」

鳴海「例の件、漁業組合長さんと掛け合っていただけでした？」

大作「(立ち上がって図面を取り)ええ、それなんですがね……船着き場の漁師も、いち早く良い漁場に出る為いろいろな思いがあるようですよ」

鳴海「船なんて、何処から出しても同じでしょう」

大作「彼等にもプライドってものがありますからねえ、簡単に船着き場を動かすってことに賛同してくれないんです。



それに、魚市場も近いでしょう。市場からも景観を損ねるから作らないでくれてクレームも来てます」

鳴海 「ですが、原料を船で運ぶ必要があります。先方も海辺の条件にはかなり神経質になっているんです。千人規模の工場ですよ。雇用の問題を解決するには、これしか方法がありません」

大作 「いや仰る通りです。本当、悩ましいところですよ、全く」

玄関の戸が開く音。

範子の声 「ただいまー」

範子は急いでリビングへ。

大作 「(大作は立ち上がって廊下に出て) おう、待ってたよ。どうぞ」

範子 「千佳さん」

千佳 「範ちゃん、御免ね、忙しいところ」

範子 「ううん。それがね、一枚しか取れなかったの」

千佳 「え？」

大作に連れられて、応接間に船江が入って来る。

範子 「頑張って待ってみたんだけど、キャンセル出たのがこれだけだった」

千佳 「そう」

範子 「どうする？ねえ？どうしよう？」

千佳 「やっぱ無理かあ」

範子 「御免なさい、私が当日の方がキャンセル出るなんて、いい加減なこと言っちゃったから」

千佳 「チケットとるのが遅かった私が悪いのよ」

範子 「まだ、もう少し時間あるから、ぎりぎりまで待ってみよう。また連絡する」

千佳 「うん、わかった。待ってる」

千佳はお勝手口から去る。範子は応接間に向かう。  
大作 「いや、今日来て貰ったのはね、君の今後についての話をしたくてね」

船江 「はあ」

鳴海 「いえ、実はね、島が独立することになって、本土でこの島の商品がブームになっているのはご存知でしょう」

船江「ええ」

鳴海「それで、うちも従業員を増やすことになりましてね、よかったですら船江さんに、うちのかまぼこ工場で働いていただけないかというご相談なんです」

範子「え？」

大作「社員契約だよ」

鳴海「ええ。賞与も年二回しっかりと出させていただきます」

大作「良い話だと思わないかい？」

鳴海「島長から伺いましたよ。あなた方は結婚を考えているのに、奥様が反対しておられると」

大作「鳴海物産さんなら、あいつも納得するよ」

範子「本当に良いんですか？」

鳴海「勿論」

範子「ありがとうございます……ありがとうございます」

鳴海「いいえ。そんなに喜んでくれるなら、こちらとしても、話した甲斐があったというものです」

船江「あの」

鳴海「はい」

船江「それは、あの、漁師を辞めろということですよね」

大作「……何言ってるんだい、そりゃあ君、漁師やりながら働くことは出来ないよ、そんなのわかりきってることじゃないか」

鳴海「何か問題が？」

範子「鳴海さんところにお世話になろうよ。こんな良い話ないよ」

船江「だけど……昇さん達に何て言えば良いか……」

範子「馬鹿じゃないの。そんなの気にしてる場合じゃないですよ」

大作「昇にも話した」

船江「え？」

大作「船江君の好きにすれば良いと言っていたよ」

船江「組合はどうなるんですか」

鳴海「漁業組合も、最近では抜ける人が多いんじゃないですかね。そんなに固執することはないと思いますがね」

鳴海の携帯にメールが入る。

鳴海「……あ、ちよつとすみません、一旦車に戻ります」

大作「あ、はい」

お勝手口から、買い物をした泰江が帰って来る。鳴海は電話を見ながら、庭から去る。

大作「どうして漁師に拘るのかね……本当に君がわからないよ。今のままでいいのかい？それじゃあうちのが納得しないよ」

範子「お父さんはどうなの？」

泰江は応接間の会話が聞こえ、気にする。

大作「あん？」

範子「お父さんは彼のことどう思ってるの？」

大作「私は別に構わんよ」

範子「だったらお母さんを説得してよ」

大作「あいつが簡単に納得するはずがないだろう。だからこうして君のことを鳴海社長にお頼みしたのに」

船江「……」

範子「御免、私、もう仕事に戻らなきや。今日最終日だから港大変なの……ねえ、もう一度考えてみて。お願いだから」

船江「……」

範子「じゃあ、行くね」

範子去ろうとして襖を開けると、泰江がいる。範子は去る。

泰江「……ね、私の言った通りでしょう」

船江「……はい？」

泰江「あなたは鳴海物産に行かないって、私言ったんです。そういう人でしょう、この人は」

船江「すみません」

泰江「謝るくらいなら最初から行きなさいよ。いいのよ、そこまで気を遣わなくて」

大作「君は漁師と範子とどっちが大事なんだね。君が鳴海物産にいけば、全部丸くおさまるのに」

船江「組合や、仲間が心配で……すみません……自分、こういう生き方しか出来なくて」

泰江「あなた、範子が彼と結婚しても良いの？」

大作「うん？」

泰江「いや、今聞こえたから」

大作「……いや……何て言うか、彼を見てると、他人事とは思えない」

船江「どういう意味ですか？」

大作「私も、人の顔色ばかり伺って生きて来た。島長なんてやる器じゃないんだ……頼まれると断れなくてねえ……いや、周りから置物の島長だと言われているのはわかってるんだ。変わりたいとは常々思っているんだが、どうしてもねえ……だから君を見ると、自分を見てるようですね……」

泰江「あなたとは違うわよ」

大作「うん？」

泰江「この人は漁師に誇りを持つてるのよ。それは仕方ないでしょう。だから簡単じゃないの。あなたに誇れるものなんてあるの？え？置きものの、だるま島長さん」

大作「うるさい……まあ、そういうことならしょうがない」

泰江は台所に向かう。入れ替わるように、二階から、国彦と貞升と春日と島村が降りて来る。

大作「あれ、貞升さん達いたんですか」

貞升「ええ、上で国彦君達とお話を」

大作「何話したんだ」

国彦「工場誘致の件です。皆さんの意思を確認しました」

大作「役所の人間だろう。島の発展を考えろ。現実を見るんだ」

国彦「現実を見ていないのは、父さんの方です」

泰江「やめなさい国彦」

国彦「……失礼します」

国彦は玄關に去る。

春日「社長は？」

大作「車にいる」

船江「(昇に) いたんですか」

島村「鳴海物産行くのか」

船江「……いいえ」

島村「無理しなくていいんだぞ」

船江「……自分……この仕事しか出来ません」

船江、廊下から玄関に去る。

春日「大作さん、どうするの工場の件」

島村「俺たち、船動かさねえよ」

鳴海が戻って来る。

鳴海「ああ、皆さんお揃いですか」

貞升「実は、上で集まっております」

鳴海「そうですか。それはそれは」

大作「まま、皆さん、座って下さい、どうぞ」

一同、応接間に座る。

鳴海「えー、明日の独立記念セレモニーでお忙しい島長に時間を割いていただき、今一度、島の方針を話し合いたいと思いますね」

貞升「社長、いろいろと考えまして、やはり私たちは、工場の誘致には反対します」

鳴海「だけど、工場を誘致すれば、女性の雇用だって獲得出来るんですよ、貞升さん」

貞升「あの工場は男性中心の職場です。私は女性が多く働ける職種が望ましいと考えます。テレアポの企業が名乗りをあげているでしょう。」

大作「勿論、あの企業にも来てもらいますよ。ただ、まだ若い企業ですから」

鳴海「一時的にはいいですがね、そんな企業は何年後かに島からいなくなりますよ」

島村「あそこは俺たちの船着き場ですよ」

大作「だから別の場所に移すと言ってるだろう。雇用の問題は切実なんだ。新しく増えた島民が働ける場所を確保しないと、折角来てくれたのに、また帰ってしまう。これじゃあ島は成り立たないぞ」

春日「それで、元々住んでいた島民の生活が脅かされるのは違うと思うよ、大作さん」

鳴海「春日さん、あなたは元々工場を誘致するのに賛成だったでしょう」

春日 「大作さんがそうしたいって言うから、それでもいいと思  
いました。それで、魚市場の連中を説得しようと思っ  
たんですが、これは納得しないとわかりました」

島村 「それだけじゃねえんですよ。漁場の問題だってあるんで  
す。あの辺りは潮の流れがいいんだ。そこに工場の船が  
毎日入られたんじゃあ、俺たちも仕事出来ねえよ」

春日 「市場も漁師も納得しないんじゃないじゃあ、誘致は実質無理で  
すよ、社長」

鳴海 「反対するのは最初からわかっていることでしよう。それを  
どうにかするのがあなたの役目です。何かを変えるには、  
そういった抵抗する勢力と戦っていかなければ、変わる  
ものも変わりません」

泰江がお茶を持って応接間にやって来る。

貞升 「漁業は島の中心産業です。それをないがしろに出来ない  
のでは？」

春日 「昔からねえ、何をやるにも、まず魚市場と漁師に伺う。  
それでこの島は成り立ってきたんだから」

泰江 「そんなに魚市場や漁師が偉いのって話ですよ」

鳴海 「これからは漁業に頼るのではなく、違う産業も発展させ  
ていかねばなりません」

泰江 「本当そう」

島村 「泰江さん、いいのかよ、工場が出来たら、島の風景だっ  
て変わるんだぞ」

泰江 「その前に病院を作るとか、そういうの話し合って欲しい  
わよ。新しい島民が増えても、島の年寄りが減ることは  
ないんだから」

大作 「お前、あっち行ってろ」

貞升 「今度、病院と老人ホームが一体になったものを作る予定  
です」

泰江 「え？」

貞升 「看護師や介護士は女性が働ける職場です。私、本土でシ  
ングルマザーを支援する団体とお話ししまして、今回の  
独立で島に来て下さる方を募りました。多くの方が興味  
を持って下さっています。資格をお持ちでない方は、病

院と老人ホームが出来るまでの間、島で農作業のお手伝いなどをしながら資格が取れるよう支援するつもりです。私の提案を元に、今島長が根回しをして下さっています」

泰江「そうなの？」

大 作「島民にも、そういった方を下宿のような形で受け容れてもらってだな、独り立ち出来るまで協力してもらおう。島には何も無いが、家と食べるものと人の思いやりがある。本土より生活レベルは下がるかもしれないが、コンビニで飯を買うくらいなら島の人間が作った料理を食べた方が子供にとっても良いだろう。全ては島民を増やす為だ。今度議会で話し合う」

鳴 海「島長が根回しすれば、上手くいきます。医療と介護の問題も重要ですからね」

泰 江「あなたもたまにはいいことするのねえ」

大 作「たまにはって何だ。俺は根回ししかしてない。というより、島長になって殆どそれしかやってない」

泰 江「根回ししか取り柄がないものねえ」

大 作「うるさい」

春 日「いや、そういう存在は必要だよ。自己主張ばかりする、島の人間にとってはねえ」

貞 升「ただ、莫大な資金が必要です。この島民の数では、個人が支払うものだけではやっていけなくて、法人税に頼らざるを得ません。それで企業を誘致しようということになったのですが」

泰 江「ふうん。それで手を挙げてくれたのがその工場とテレアポって訳」

春 日「そうなんだ」

大 作「お前、何座ってんだ」

泰 江「いいじゃない。私も島民代表として、聞く権利があります。だけど、あなたは最初島を観光地にするっていつてなかったっけ？」

大 作「島民の半数以上が工場誘致に賛成なんだ。そうした方がいいに決まってる」

鳴 海「経済効果も工場の方が断然大きいです。法人税も期待

出来ます」

泰江「それが理由？」

大作「悪いか」

泰江「別に」

島村「やっぱり島は観光地にするべきだって。温泉だって出るんだし」

鳴海「そりゃあ独立国家が物珍しくてねえ、最初は来るでしょう。だけど、観光ってのは私たち主導の産業になりえないんです。本土の景気にも左右されるでしょうからねえ」

大作「観光地にするなら、本土だけじゃなく他の国々からも来てもらえるようにしないと。温泉だけでは難しいでしょう」

島村「いけますって。これだけ自然が残ってんだから」

泰江「何言ってるの、昇。あんた本当に島を観光地にしようと思ったらねえ、まず自分たちが変わらなきゃ駄目よ」

島村「何が？」

泰江「あんた達の生活厳しいんでしょ？まずそこから変えないと。どうするの？船江さんの顔、ただでさえ冴えないのに、日に日に哀愁が増してるわよ」

島村「それなんだけど」

貞升「漁師さんに関しては、国彦君が動いてくれています」

大作「国彦が？」

貞升「はい。高校時代のお友達が本土で飲食店のチェーンを経営してらっしゃるそう。昇さんたちと産地直送の契約を結べないか交渉してくれるそうです」

大作「産地直送って、市場を通さずにやるあれか？」

島村「ああ。春日さんに話して貰って、魚市場の了承も貰った」

春日「契約すれば、船の燃料代くらいは出して貰えるそう。魚によっては今まで通り市場に卸してもいいし、そっちに売っても構わない。漁師の自由だ」

島村「組合に関係なく個人で契約していいことにした。俺達も変わらねえと。国彦が話決めてくれりゃあ漁師も少しは収入が安定する」

大作「あいつ、いつの間にかそんなことを」



泰江「そう、国彦がねえ」

島村「な？泰江さん、俺達だって進化してんだろう」

泰江「馬鹿ね。新しく島に来た人達が、あんた達が港の近くの路上で酒盛りしているのを不思議そうに見てるのよ。毎日昼から遊んでいるあの人は浮浪者ですかって聞かれたから、私も似たようなもんですって言っといたわよ」

島村「朝働いてんだよ」

鳴海「工場は絶対に誘致するべきです。千人以上の雇用が出来、周辺の商店街や飲食店なども潤うんです。これは大きな経済効果ですよ」

春日「だからね社長、漁師も魚市場も反対してるから、現実的には出来ませんよ。あの辺りは漁師達が住んでるんです」

島村「俺達、地上げ屋が来ても動かねえよ」

春日「ね？これでどうやって工場を誘致するんです？」

鳴海「……困りましたねえ。明日は独立記念日ですよ。世界中からプレスが集まってるんです。島長もセレモニーの記者会見で島の今後について語らなきゃならないんです。こんなところでつまづきたくないんだ私は」

貞升「社長は工場の重役さん達をお招きしているから、早く決めたいでしょ」

鳴海「そりゃあお呼びするさ。こんな島にわざわざ工場作って下さるんだ。いいかね、こんな有り難い話ないんだよ、君。病院と老人ホームを作るんだよねえ」

貞升「そうですよ」

鳴海「じゃあ、その金は何処から引つ張って来るの？そういう具体的な提案をしなさいよ。テレアポさんが2、3年でどこかへいったら、またうちしか企業らしい企業がなくなるんだ。これじゃあ病院も老人ホームも作れないよ」

貞升「それは……」

春日「こないだ、うちの使っていない倉庫を借りたっていう本土から来た人達がいてさあ、何かと思ったらIT企業なんだってさあ。ITは何処に住んでも同じですからって。だからね、島民はまだまだ増えると思うよ。そうすれば税込で何とかなるんじゃない？そんな大企業じゃなくて

も、中小企業が沢山来ても良い訳だし」

鳴海 「そりゃあ中にはそういう人もいますがね、本土から島に  
来た人間の多くは、農業を体験したり釣りを楽しんだり  
しているだけです。そんな趣味程度の生活だけでこの先  
もずっとやっていけますか？もっと島民の未来を考えな  
さいよ」

泰江 「……どうするの？」

大作 「何が？」

泰江 「これじゃあいつまでたつても何も決まらないじゃない」  
大作 「……仕方ありません……社長……やはり、あの工場の誘  
致は諦めましょう」

鳴海 「何言ってるんですか、島長」

大作 「いや、私が進めて下さいとお願いしたのに……結局島民  
の意思を纏めきれず、すみません……」

鳴海 「諦めちゃいけません。こうなったら多少強引にでも追い  
出しましょう」

島村 「そんなことさせねえよ！」

春日 「俺達の島なんです」

大作 「……社長、漁師も、魚市場の人間も、皆プライドもって  
やってるんです。これ以上話しても無駄です」

玄関から国彦がやって来る。

鳴海 「勝手なことを言うな！」

国彦は立ち止まる。

鳴海 「島の将来はどうなるんだ？！え？！島が減びるかもしれ  
ないんだぞ？！あんたにその責任が負えるのか？！」

大作 「……こういう……生き方しか出来ない人間もいるんです  
……申し訳ございません……申し訳ございません……」

国彦 「……」

鳴海 「謝って済む問題じゃない……謝るくらいなら、島が潤う  
別の産業を提示してくれ……ほんつとに……この島の人  
間は……馬鹿ばかりだ……」

間。国彦が庭からやって来る。

国彦 「ちよつと、宜しいですか」

大作 「何だ」

国彦「お話が」

大作「今、大事な会議の最中だ」

国彦「その件で」

泰江「何」

国彦「社長、私も皆さんが長い間議論しているのを見ておりました。明日は独立記念日です。先程私もお話を伺いましたが、この時期になって、春日さんや昇さん達の反対の意思がこれだけ固ければ、工場誘致は無理だと判断しました。父だからという訳ではなく、島長のご判断は正しいと思います」

鳴海「だったら、代替案を示しなさいよ」

国彦「その件について、ある方がどうしてもお話を聞いて欲しいというので、お連れしました」

大作「え？」

貞升「どなたです」

国彦「どうぞ」

庭に椿がやって来ると、応接間の縁側で、会釈する。

春日「ゆかりちゃん」

島村「お前、今日帰るんじゃないのか」

椿「うん。船の時間までしかいられません、島について私の意見を聞いていただきたくて、参りました」

国彦「座って」

泰江「待ちなさい。この人は島の人間じゃないでしょう」

国彦「島の人間じゃないからこそ、わかることがあると思う。」

ですが正直、これでうまくいくかどうかはわかりませんが皆さんで聞いていただいて、ご判断していただきたいと思っ  
っています」

泰江「無駄よ。本土の人間に、何がわかるって言うの」

春日「泰江さん、もう時間がないんだ。明日には方針を発表しな  
きゃならない」

貞升「お聞きしましょう」

泰江「……」

大作「何だ」

椿「私は、本土と同じような経済優先の国づくりでは、上手

鳴海 「くいかないと思います」

鳴海 「何故です」

椿 「独立に向けて本土からこの島に移住なさる方々は、どんな方々だと思いますか」

貞升 「多いのは、釣りやダイビングなど、仕事より趣味に生きたいという方々だと伺っています」

椿 「その通りです。移住したい方は、仕事より余暇を楽しみたいと思っっているんです。計画しているような製造業の工場は本土に沢山ある訳ですから、働く為だけに、故郷の国を捨て、この独立国家の住民になるとは考えにくいです」

鳴海 「そうですね」

春日 「ですけど、仕事を探す為に、わざわざ違う国の人間になりますかね」

島村 「確かに、普通なら出稼ぎに行くよな」

国彦 「ええ。本土にも大勢の外国人が働きに来ていますが、その人は別に、故郷の国を捨て、国籍まで変えることはしません」

椿 「この島に移住する方々は、国籍を変える覚悟で来ていらつしやるんです。これは凄く大きな決断です。それだけこの島に期待しているということですよ」

泰江 「こんな何もない島の、一体何処に期待してらるって言うの」

椿 「以前、本土の企業に勤めていました。人事部で、リストラや自主退社していただく人材を調査する仕事でした。とても辛い作業でした。周りからは死神なんて呼ばれて、でも、企業は人件費を兎に角削減しようとしています。人よりもお金を大切にするという風潮が、本土全体に蔓延しています。……でも、この島は違います。お隣さんや職場の方々から、いつもいろんなものを頂戴します。周り皆さん顔見知りですから、ちよつと顔を見ないご年配者を案じて様子を見に行ったり、困ったときはお互いに助けて生きています。じゃありませんか。島は、お金より人を大切に生きています。騒ぐ程のことじゃないでしょう、本土の田舎」

鳴海 「そんなの、騒ぐ程のことじゃないでしょう、本土の田舎」

の方と大して変わりないんですから」

椿 「本土では、私のような人間は社会不適合者だと扱われ  
ます」

春日 「え」

椿 「会社にいた頃、同期入社で仲が良かった子が、自主退社  
を勧めるリストに上がりました。その子は会社に残りた  
かったのですが、上司からは円満に退職してもらえら  
う伝えろというんです。私は正直にその子に状況を説明  
しました……結果、友達を一人無くすことになりました。  
私は上司に訴えました。どうして同期の友達にこんなこ  
とをしなければならなかった。……それから、私  
が自主退社に追い込まれる対象になりました……私は間  
違っていったんでしょうか。会社を辞めてからも、ずっと  
そのことを考え続けていました。ですが、この島に来て、  
自分を信じられるようになったんです。私のような人間  
が、本土には大勢います。この島には、そういった方々  
を受け容れてくれる、穏やかな時間が流れています」

島村 「ニートって」

国彦 「仕事をせず、家に引きこもっている若者です。本土には、  
そういった方が60万人もいるんだそうです」

鳴海 「そんなに」

国彦 「空き家を使ってシェアハウスにし、ニートに共同生活を  
させるといふようなことを仰っていました。ニートもい  
つかは働かなければいけないと思っただけです。そ  
のきっかけを作ったあげればと。こんな風に、本土で生  
きづらいと感じている方々に島に移住してもらえよう  
な仕組みを整えてみてはいかがでしょう。本土の経済  
至上主義を真似るのではなく、僕らの島は、人間至上主  
義のライフスタイルを打ち出すのです」

大作 「人間、至上主義」

春日 「そうか。成る程、その手があったねえ」

貞升「確か、本土で生活が苦しいと感じている者たちは、約4割もいます。小中学校の不登校者が11万人、高校生の不登校者も5万5千人いるといわれています」

島村「その人たちの一部でも島に来てもらえたら有り難えよなあ」

椿「何よりそれは、弱者の立場にたつという、この島の憲法の理念と一致するのではないでしょうか」

大作「ああ、言われてみれば、そうですね」

春日「うん、そうだよ」

鳴海「ですが、その人達の仕事はどうなるんです？わざわざ呼んどいて、趣味程度の釣りや畑仕事で満足しますか？」

泰江「あら、私は逆に、農業をやったらいと思っんです。本土はあれでしょう、農業の人口が減っているっついでし」

島村「ああ、大豆なんかの自給率って奴も、相当低いらしいからねえ」

泰江「大豆を作って本土に売ったらいいじゃない。お金なんて最低限あればいいの。それより食べるものを作る方が大事ですよ」

鳴海「そんな生活じゃあ島民は豊かになりませんよ」

泰江「豊かさも考えようですよ社長。あの震災のとき、いくらお金があっても、食べるものが全然買えなかったっていうじゃありませんか。そんなお金の一体どれだけの価値があるっついでいうんです。生きる為に必要なのはやっぱり食料ですよ。どうして本土の人間は、そこから目を背けて生きていられるんでしょう。不思議でしょうがありませんよ。私が言いたいのはですね、自分で作った野菜を自分で食べるっついでことの良さです」

島村「うん、その方が絶対美味いって」

泰江「でしよう」

春日「昔からそうだけど、あれ何でだろうなあ」

貞升「食べ物のありがたみがわかるからですよ。一緒に過ごした時間が、物語になります」

大作「いやあ理屈じゃありませんよ。人間てのはそういう風に

出来ているんです、昔から」

春日 「本土のコンビニに行ったら弁当が一杯おいてあったけど、大して美味しくもなかったねえ。あんなので満足出来るなんて、本土の人間は味覚がおかしくなってるよ」

国彦 「皆、仕事で忙しいんですよ。そういうときは、味なんて感じませんから」

椿 「島は、味覚や、人間らしさを取り戻せる場所です。国彦君が言った人間至上主義というのは、そういうことだと思いません」

泰江 「……あなた、今いいこと言ったわね」

椿 「はい」

泰江 「人間らしさを取り戻す……それよ……本土で生きづらい人たちを救ってあげるのよ、育ててあげるのよ、この島で」

大作 「うん、確かにいい。皆さんいかがです」

貞升 「私は賛成です」

島村 「俺も」

春日 「いいと思うな」

鳴海 「ですが、生活レベルが低下します。本土の人は嫌がるでしょう。ただの絵空事です」

大作 「社長、椿さんが仰るように、本土から来る連中は、島での生活に憧れを抱いているんです。私たちからみると、どこがいいのって感じですが、コンビニで御飯を買うよりも、手間ひまかけて手作りした料理を食べるとか、人と触れ合って話すとか、島に期待されてるのは、そういう人として当たり前のことや場所だってことです。社長の仰る生活レベルの基準を、もう一度考え直す必要があるんじゃないでしょうか」

春日 「そうですよ、社長。発想を転換してみましよう。本土では働く時間に追われて出来ないことが、島では出来るんです。島の暮らし自体に価値があるってことなんです」

鳴海 「……」

貞升 「そういえば……独立を記念して、明日から本土を繋ぐフェリーの名前が変わりますよね」

島村「ああ……方舟、だっけ」

鳴海「方舟……」

貞升「……どうして気付かなかったんでしょう。本土の人達も、島をそんな風に捉えてくれていたのに」

泰江「答えはそこにあっただって訳ね。社長さんはいかがです？」

鳴海「……わかりました……皆さんがそうしたいのなら……工場の誘致は断ります」

大作「社長……」

鳴海「島長はあなただ。……もういいんですよ……どのみち、誘致は無理だ……人を救い、人を育てる、島で人間らしさを取り戻す、このライフスタイルを世界に向けて発信しましょう」

大作「ですが、本当に上手くいくかどうかわかりません……失敗したら経済も駄目になりますし、島民も増えませんが……あなた一人を抱え込む必要はありません。その為皆で知恵を出し合っている訳ですから。失敗したら修正しながらやっていけばいいんです。何せ前例のない国家になる訳ですから。どうやら私は、既存の概念にとらわれすぎていたのかもしれませんが」

庭から磯辺が現れる。

磯辺「ああ、よかった。まだ皆さん、いらっしやっただんですね」

大作「磯辺さん」

磯辺「憲法草案の最終版をお持ちしました」

春日「ああ、ご苦労様」

大作「待ってましたよ」

磯辺の憲法草案を皆に配る春日。

磯辺「国彦君、誤字脱字がないか、急いでチェックお願いします。印刷屋を待たせてあるんです」

国彦「わかりました。すぐやります」

国彦は熱心に憲法を読む。島村は台所へ向かう。

磯辺「問題なければ、これを明日の独立記念式典で、島長に読み上げていただくと思います」

大作「緊張しますねえ」

泰江「その前に、あなたの酷い声聞かされる身にもなって欲し



いわよ」

大作「うるさい」

泰江は台所に向かう。島村は台所で冷蔵庫を開ける。

島村「泰江さん、腹減った」

泰江「そういうと思った。ほれ、おにぎりと煮物入れといた」

島村「おおっ、流石。ありがとうございます」

と泰江は島村にタッパーを渡す。

泰江「船江さんから聞いた。急がしくて船出せないって。生活出来るのかい」

島村「なあに、後ちよつとの辛抱だ」

泰江「困ったときはいつでも言いなさいよ」

島村「ありがとう」

島村は応接間に戻る。磯辺は疲れた様子で肩をまわしている。

貞升「磯辺さん大丈夫ですか、寝てないんじゃないやありません」

磯辺「皆さんも同じでしょう。でも明日は重要な日ですから、何とか間に合わせたくて」

貞升「では、有り難く拝読させていただきます」

磯辺「宜しく願います」

鳴海は縁側で靴を履く。

鳴海「……（立ち上がって）では、私はこれで」

大作「ああ、はい」

鳴海「失礼します」

大作「ご苦労様です」

貞升「ご苦労様でした」

皆礼をする。鳴海は庭から去る。

貞升「すみません、私もこれで」

大作「そうですか」

貞升「もうすぐ最後の船が出ます。知り合いが本土に行くので、

お見送りに」

大作「寂しくなりますがねえ、笑顔でお見送りしましょう」

貞升「はい」

春日「俺も、新しいコイン出来たっていうから、取りに行つて来る。後で持つて来るよ」

大作「ああ、頼む」

貞升「では」

大作「はい」

春日「後で」

大作「うん」

島村「行くんだろう」

椿「うん」

島村「元気でな」

椿「昇さんも」

貞升は廊下から、春日は庭からそれぞれ去る。大作は廊下で貞升到礼をする。島村は庭に出て自転車を  
持って来る。

椿「二階、上がったもいい？」

国彦「え？」

椿「ここから港全体が見渡せるんでしょう」

国彦「ああ、うん」

国彦は立ち上がろうとする。

椿「あ、いいよ。独りで行く」

国彦「大丈夫だよ」

椿「大事な仕事の最中でしょう」

国彦「奥の、突き当たりだから」

椿「うん」

椿は二階へ上がる。

国彦「初めて意見が割れたね、春日さんと」

大作「そうだった？」

国彦「あの人が父さんの意見にあんなに反対したの、見たこと  
なかったから」

大作「……」

大作は廊下に出る。

大作は仏間に去る。島村は庭に出て、自転車に乗っ  
て行くこうとする島村の前に。

磯辺「……あの……先日お電話でお願いした件ですが」

島村「船のチケットは？」

磯辺「一枚は確保しました。今、範子さんが探してくれていま

す」

島村「そうか」

磯辺「お願いです。陽平君に会ってあげて下さい」

国彦は島村と磯辺の会話を聞いている。

島村「……」

磯辺「今日が最後ですよ。もう、しばらく会えないんですから」

島村「出来ねえよ」

磯辺「何故です」

島村「……恥ずかしい話……このひと月、島の会議や準備で、まともに船出せてねえんだ……生活がかつかつで、餓別も出せねえ」

島村はちらりと国彦を見る。国彦は憲法を読む。

磯辺「いいじゃないですか、そんなのは。会ってあげるだけでいいんです。陽平君だって、あなたに会いたがっていると思います」

島村「俺にも面子ってもんがある。親らしいこと出来ねえ奴は、子供に会う資格、ねえよ」

島村は自転車で去る。

磯辺「島村さん」

国彦「……強情な人です。陽平君のこと、大好きなくせに」

磯辺「……会議はどうでした？工場誘致の件は？」

国彦「なくなりました。その代わり、島で人を救い、育てるというライフスタイルを提案して、移住者を募ります。本土の経済至上主義はやめて、人間至上主義を島は打ち出します」

磯辺「成る程、それはいい……私も5年かけて、本土に負けないう教育方針を作るつもりです。本土の教育は大学に入る為の勉強なので受動的で、一番難しい国立大学も、世界中の大学の中では、学力は凄く低いですからね。島の教育は、ここにいながら世界で戦えるビジネスが出来るような人材を育てたいんです。生きる為には知識が必要で、その為に勉強します。子供達に能動的に学ばせたいと考えています」

国彦「僕も今回の件で、新しい国を作る為に何か良いアイデア

はないかってネットを漁ってみましたけど、そこには僕達の欲しい情報がありませんでした。ネットって凄い情報量だけど、新しい国のシステムについては何も書かれていません。知ることは出来ても、生み出すことは出来ないですよね」

磯辺「……後5年あればなあ、陽平君も本土に行かなくて済んだのに」

国彦「……千佳さんいなくなったら、寂しくなりますね」

磯辺「もう、割り切ってますから。チケット取れなかったらどうしましょう」

お勝手から庭に向かって、千佳が現れる。

国彦「最悪、昇さんに船で送って貰ったらどうです？」

磯辺「私もそう言ったんですが、千佳が嫌がってます」

千佳に気づく磯辺。

磯辺「どうだった？」

千佳「今、範ちゃんから電話があったんだけど、やっぱり駄目みたい」

磯辺「そうか」

国彦「千佳さん」

千佳「うん」

国彦「昇さんに送って貰うの、嫌なの？」

千佳「借り作りたくないし。範ちゃんがね、船江さんに頼んでみるって」

磯辺「そうか」

国彦は憲法を熱心に読んでいる。泰江は大作にお茶を出す。

泰江は応接間の湯のみを片付ける。千佳と磯辺は縁側に座り、泰江には気づかない。

千佳「……憲法は？」

磯辺「うん、何とか目処がついた」

千佳「じゃあ、陽平と話してあげてよ」

磯辺「勿論……だけど、何て言ったらいいんだろう……もしかしたら、パパになるかもしれないって言ったのに……」

千佳「……あの子、夕べね、本土に行かなくても良いよって、

私に言うの。どうしてそんなこと言うのって聞いたら、  
……わたしが、あなたと離れるからだって……僕のせい  
で、ママと、磯辺さんが離れてしまうのが、申し訳ない  
って……泣きながらね……言うのよ……ママがね、この  
恋を逃したら……もう……年取って……おばあちゃんに  
なっちゃうから……次の恋はないかもしれないよって……  
……そんなこと心配するのよ……あの子……わたし、困っ  
ちゃって……もう、充分大人なのよ」

磯辺、震えてうつむく。

泰江「子供ってのは、いつのまにか、頼もしくなるのよねえ……  
……会って来たら、磯辺さん」

磯辺、隣の家を走る。

千佳「昇、帰ったんですか」

泰江「うん」

千佳「挨拶ぐらいすればいいのに」

泰江「え、会ってないの、陽平君と」

千佳「そうなんです」

泰江「何考えてんだか」

泰江は携帯電話を取りに台所へ向かう。

国彦「あの」

千佳「うん」

国彦「昇さん、独立の準備で忙しいらしく、船を出せてないん  
です」

泰江「だから何」

泰江は台所へ行き、携帯を取ると島村へ電話しながら  
ら応接間に戻って来る。

国彦「あの人、千佳さん達に餞別を渡したいんです」

千佳「え」

国彦「でも、生活が厳しいみたいで、お金が」

泰江「それで会いに来ないの」

国彦「だけど、本当は会いたくしょうがないんだと思います」

泰江「馬鹿ねえ。くだらない見栄なんて張って」

千佳「そういうところあるんです。昔から」

泰江「（電話で島村が出たように）こら！あんた今何処？すぐ来

なさい。千佳ちゃんと陽平君に会ってないそうじゃない。  
……ああ、もうごちやごちや言っていないで、さっさと来ればいいの、このおたんこなす。今すぐよ！3分で来れるでしょうが、自転車なら。……うるさい。3分で来ないと、もうご飯のお裾分けしてやらないからね。……はい動く！自転車乗った？はい、じゃあ切るよ（と電話を切る）……待ってよ、泰江さんのご飯がなかったら俺死んじゃうからさだつて」

大作家が応接間に来る。

大作家「おい、何騒いでんだ、騒々しい」

泰江「昇が陽平君に挨拶してないっていうから」

大作家「ええっ？」

泰江「千佳ちゃん、いろいろとお世話になったわね」

大作家「本当」

千佳「そんな、とんでもない。こつちがお世話になりっぱなしで。本当に、ありがとうございます」

泰江「自分の人生より、陽平君のこと思ったら、やっぱり本土に行くべきよね」

千佳「就職するのに、国籍が違くと不利になるって、磯辺さんが」

大作家「陽平君、お勉強出来るからね。きっと立派になるよ」

千佳「いいえ。父親があれですよ、たかが知れてますって」

泰江と千佳、笑う。

大作家「陽平君の為とはいえ、よく決心したねえ」

千佳「本土では、シングルマザーの生活は本当に大変だと、貞升さんから聞いています。シングルマザーの子供は貧困になる率が高いんだそうですよ。陽平が貧困の連鎖から逃れるには、結局学力しかないって磯辺さんが言っていました。それで思い切って決めたんです」

大作家「勇気があるよ、千佳ちゃんは」

千佳「無鉄砲なだけです」

自転車で船江がやって来る。

船江「千佳さん」

千佳「船江さん」

船江「範子から聞きました。いいんですか、自分の船で」  
千佳「お願いします」  
船江「わかりました。荷物は」  
千佳「大体は送ったの。バッグ二つだけ」  
船江「陽平君はうちにいますか」  
千佳「ええ」  
船江「じゃあ聞いて、先に船に積んでおきます」  
千佳「ありがとう」  
船江は自転車で勝手口の方へ去る。  
千佳「……じゃあ、私、行きます」  
泰江「あ、ちよつと待ってて」  
泰江は台所へ向かう。  
大作「体につけてな」  
千佳「はい」  
泰江が台所から紙袋を持って来る。  
泰江「これ、陽平君に食べさせて」  
千佳「ああ、ありがとうございます」  
泰江「困ったら、いつでも帰って来なさい」  
千佳「はい」  
島村が自転車でやって来る。  
泰江「あんた何考えてんの、挨拶もしないで」  
島村「……陽平に会ったら……行くなつて言っちゃいそうだから」  
大作「行くんだよ」  
島村「……お前、船のチケットは？」  
千佳「ないけど。船江さんに送って貰うことにした」  
島村「亮に？」  
千佳「……ええ」  
島村「……そうか……親らしいこと、何もしてやれなくて……  
すまん」  
千佳「……いいよ。最初から期待してないし」  
島村「陽平のこと、頼んだぞ」  
千佳「わかつてる」  
島村「それと……これ」

島村はポケットから、くしゃくしゃの一万円札を3枚出す。

島村「悪い……今、これしか、ねえんだ」

千佳「……馬鹿ね、いらな（いわよ）」

島村は、くしゃくしゃのお札がみつともないと思つたのか、縁側でお札を懸命に伸ばしはじめた。お勝手口の方から磯辺が現れる。磯辺は、島村の姿を見て足を止める。島村はしわを伸ばし終えると、再び千佳の前にお札を差し出す。

千佳「あなただつて、生活あるでしよう？」

島村「お前にじゃねえよ、陽平にだよ」

千佳「……」

島村「ほら……出したもん引つ込めらんねえだろう？」

千佳は、ゆっくりとお札を受け取る。

泰江「……（涙を拭きながら）お前ねえ、こういうのはピン札を封筒にでも入れて渡すもんだよお。待ちなさい、私が綺麗なお札と替えてあげるから」

千佳「……いいです泰江さん……これで……いいんです……ありがとうございます……大切に使います」

島村「……おう」

礼をする大作と泰江。見つめる島村。千佳は振り返ると、磯辺に気づく。

千佳「……」

磯辺の背後から船江がやって来る。

船江「昇さん」

島村「うん？」

船江「陽平君が、折角だから、昇さんの船で行きたいって」

島村「あ？」

磯辺「……ということなので、お願い出来ませんか？」

島村「だけど……」

磯辺「いいよな」

千佳「……」

磯辺「最後なんだ」

千佳「……（溜め息）まあ……しようがないか。お願いしてい



い」

船江「やったー！」

磯辺「陽平君、喜びますよ」

船江「良かったですね、昇さん！」

島村「馬鹿、何にも良くねえよ！……まったくしょうがねなあ陽平の野郎、甘えたことぬかしてんじゃねえよって俺がビシーツと叱つといてやるからよお」

千佳「はいはい」

と走る島村。追いかけて去る船江。

泰江「顔がにやけ過ぎだつーの」

国彦「磯辺さん、これ、問題ありませんでした」

磯辺「ああ、ありがとう。じゃあ今から印刷屋に行つて、そのまま港に直行する」

千佳「わかった」

大作「すみませんねえ」

磯辺「とんでもない。じゃあ後で。失礼します」

泰江「いつてらっしゃい」

磯辺は庭から表の方へ去る。

千佳「じゃあ、行きます」

大作「はい」

泰江「港は人が多いから、ここから見送るね」

千佳「はい」

椿が二階から降りて来る。

千佳「お世話になりました。失礼します」

国彦「千佳さん、また会いましょう」

大作「ごきげんよう」

泰江「ごきげんよう」

千佳はお勝手口の方へ去る。手を振って見送る大作と泰江と国彦。二人が振り返ると、椿が立っている。泰江はスツと台所へ向かう。

大作「お別れですね」

椿「はい」

大作「あなたのおかげで、今日の会議は有意義なものになりました。感謝します」

椿 「いえ、私は何も」

大作 「港まで、送ってあげなさい」

国彦 「うん」

大作は応接間を出て、リビングに向かう。

国彦 「……こんな小さな島が独立なんて……絶対にやっていけないと思っただ……」

椿 「うん」

国彦 「……僕は、この島が、ずっと嫌いだった。狭くて、隣近所は皆知り合いで……仲いいのはいいことだけど、その反面、排他的で、嫉妬や妬みが渦巻いてる。こんな狭いところで生きていると、人間の価値観は変わらない。世界はもっと広いはずだ。こんな小さな世界で一生を終えるなんて、生きる喜びの殆どを知らずに死んでいくようなものだって、そう思ってた」

椿 「生きる喜びを知らないのは、本土の人達よ。私、最近わかったことがある。この島の、海や自然は最高に綺麗だけど、結局ね、人が一番美しいのよ」

国彦 「たかが不倫で、よってたかって陰口いうような連中だよ」

椿 「それは、前に話したでしょう。島の人は不倫が憎いんじゃないくて、知っている人が傷つけられたことが憎いんだよ。友達が傷つけられたら守りたくなるのは当然だよ」

国彦 「そうだね……僕は、君が困っているときに……守ってあげられなかった……」

椿 「そんなの、気にしてないから」

国彦 「君には感謝してるんだ。これまでの僕なら、君を攻撃する島民の方が悪いって決めつけてた。だけどそうじゃなかった。悪いのは、何でも島民のせいにして、君を守ろうとしなかった僕だ。言ってもどうせ変わらないだろうって、目の前の困っている人を救おうとしなかった僕自身だ。言葉にしなかった僕自身の責任なんだ……」

椿 「……世界の広さもいいけど、狭い世界だからこそ、出来ることもある。武力を持たず、言葉で世界と戦うなんて、素敵だと思う」

国彦 「……確かに、島の憲法はある意味理想的だ。本土の人間

も、国家を作るのはそんな甘いものじゃないっていう。だけどね、島民たちは今、その理想を信じようとしている。独立に向けて、島民達の気持ち、確実に変わってきている。僕だって、最初は本土に行きたかった。けどね、隣近所がみんな独立に前向きになっているのを見ていると、何だか勇気が湧いて来るんだ。みんなが前向きになるなら、僕もならなきゃって、そういう気持ちになって、これまでやってこれた。これは、きっと田舎にしか出来ないことなんだ。僕はね、この島に生まれて本当に良かったなって、初めてそう思えた……」

椿 「……行くね」

椿は、立ち上がると縁側に座り、履物を履く。国彦は車の鍵を取り、側に座る。

国彦 「……行かないですよ」

椿 「……」

国彦 「……お願い……君のこと……認めさせるから……親にも……島のみんなにも」

椿は国彦の肩に顔を埋めて、

椿 「……辞めて……それ以上言ったら、本当に行けなくなっちゃう……」

国彦 「……」

間。

椿 「(離れて立ち上がり) ……じゃあね」

国彦 「(椿を捕まえて) ……待ってよ……行かないですよ」

椿 「ちよっと、何やってんの？」

国彦 「(椿の足にすがりついて) お願い……行かないですよ……ゆかりちゃん……俺まだ別れたつもりないよ……独りにしないでよ……」

と狂ったように嗚咽しながら号泣する国彦。その騒ぎで大作と泰江が応接間にやって来る。

泰江 「……え、格好悪う」

大作 「……」

国彦 「……ゆかりちゃん……ゆかりちゃん……」

大作 「ほら、何やってるんだ、みつともない」

大作は椿から国彦を引き剥がす。

大作「すみません、お急ぎのところ」

椿「いいえ」

大作「お前、車運転出来るのか。国彦」

国彦は泣いている。勝手口の方から船江がやって来る。

船江「どうしたんですか」

大作「ああ、船江君、ちょうどよかった。この人を港まで連れてつてくれないか」

船江「ああ、わかりました」

大作「さあ」

椿「でも」

大作「船に乗り遅れたら大変です」

椿「はい、わかりました。お願いします」

自転車に乗る、船江と椿。

船江「時間ないんで、急ぎましょう」

椿「じゃあね」

国彦は泣いている。

大作「はい」

泰江「お気をつけて」

椿は自転車に乗り、船江と椿は自転車で行く。国彦は二階へ駆け上がる。

泰江「(遠くに)……あ、今言うことじゃないですけどね、船江

さん、範子との結婚、オッケーですからね」

大作「本当に今言うことじゃないよ」

と、応接間へ上がる大作と泰江。自転車で戻ってくる船江と椿。遠くから何か音が聞こえる。その音は、船江の声だった。

船江「……えーつつつつつつ?!?!?!」

大作「見ろ！戻って来たじゃないか！」

船江「本当ですか！お母さん！」

泰江「本当ですよ」

船江「うおー！うおー！（と喜びの雄叫び）」

大作「いいから君は先に送って来なさい！乗り遅れたらどうす

るだ！」

船江「はいっ！すみません！」

船江と椿、自転車で去る。

大作「……全く」

泰江「んもう、馬鹿ねえ、乗り遅れるように、言ったのに……」

大作「ええっ？」

泰江は廊下から二階へ上がり、バルコニーへ向かう。

大作が応接間上がる。春日が来る。

春日「大作さん」

大作「おう、見せて」

大作は春日から、新しい貨幣と紙幣を受け取ってみる。春日もゆっくりと応接間へ。

大作「(お金を見て)……なかなか良いじゃないか、ねえ？　けど、一万島円でちよつと言いつらくないかねえ、どう思う？」

春日「今、島銀行の頭取と話したんだけど」

大作「うん？」

春日「ちよつと嫌な噂を聞いた」

大作「何だね？」

春日「島が独立しなきゃならなくなったのは、本土が申請を忘れたからじゃないって」

大作「……え？」

春日「本土の政府は、この島を、最初から切り離すつもりだったっていうんだ。そういう計画だったって」

大作「……」

春日「頭取が謂うにはね、こないだの戦争で、本土では、都心に近い場所に同盟国の基地を配備しようとする計画があるんだってさあ。だけど、基地を作るとなると、住民から反対されるでしょう。それで白羽の矢がたったのが、この島じゃないかって言うんだ。一旦領土から切り離しても、こんな小さな島だからどうせやっていけないと本土の政府は踏んでるんだって。だから、そのうちね、島を本土に返還する時期が来て、そのタイミングで、この島に同盟国の基地を誘致するっていうシナリオがあるん

だつてさあ。そんな話、信じられる？」

大作「……その話は、私も聞いた……恐らく、本当だろう」

春日「……大作さん……知ってたの？」

大作「……つい、2週間ほど前になあ」

春日「冗談じゃないよ。島の人間を何だと思ってるんだよ。どうして島民に知らせないの？」

大作「……それを言ったら、島民は本土に反感を持つだろう……それは、この島の新しい憲法に反する」

春日「だからって、こんな重要な事実を伝えないのはさあ」

大作「春日君、これを言ったら、今後ずっと本土との間に遺恨が残ってしまう。それでも良いのかい？」

春日「だけど、本土の都合で、そんな……許せないよ」

大作「もっと島民が増えれば、向こうも無視出来なくなる。そうしなければいいと思つたんだが」

春日「だから、工場を誘致しようって言い出したの？」

大作「……ああ」

春日「……どうして言ってくれなかったの？……だったら俺も魚市場を説得しようよと、もっと努力したのに」

大作「いやあ……もう、いいんだ」

春日「どうして？」

大作「島が本土に返還されないように、我々が自立した国家を作ればいい。というより、生き残る道は、それしかない」

春日「そうだったら、本土が攻めて来たりするんじゃない？」  
間。

大作「本当にそう思うかね？」

春日「え？」

大作「政府とはいえ、所詮は人間がやっていることだ。元々同じ国の人間だった者に、そこまで酷くはなれないと、私は思う」

春日「……」

大作「もっと、人を信じてみようじゃないか……私は……本土の人間を信じると、そう決めた……大体、こんな小さな島国だよ、隣りの国と仲良く出来ないんじゃないや元々やっていけないさ……そしてそれはねえ、我々の気持ち次第だ」

……お隣さんに対して接する、ほんの少しの、助け合いの精神だ……凄く簡単なことだ……」

春日「……そうだよ。人口が多いとか少ないとか関係なく、一人一人の命の重さは、変わらないもんなあ」

大作「そうそう。それは、本土の人間だってわかってるんだから」

間。

大作「……あれ……言つてよ」

春日「……」

大作「あれ」

春日「……大作さんがそういうなら……俺はそれで良いと思う」  
大作「そうそう。それがないと、私も何だか、勇気がでなくてねえ。やっぱり、持つべきものは、友達だよねえ」

船の汽笛の音。バルコニーから、泰江が駆け下りて来る。

泰江「あなた！……あなた！……最後の船が通るわよ」

大作「ああ、お見送りしなくちゃ」

春日「俺も行く」

3人は二階へ上がる。二階から旗をふる大作と泰江。旗には「島も頑張る」「本土は友達」などと書かれている。

大作「みんなー、ありがとう！」

泰江「島のこと、忘れないでねー！」

春日「いつでも帰つておいでー！」

泰江「……あ、あれ昇の船？千佳ちゃんと陽平君じゃない？」

大作「千佳さーん！」

泰江「陽平君！」

春日「みんなありがとう！」

と続く大作達の声。

音楽。見送っているバルコニーの3人の姿。

肩を落として、

下に降りて来る国彦。

大作と泰江と春日の声。

島を去る者と、

島に残る者たち……。  
それぞれの、  
想いの先にあるのは、  
希望か、  
絶望か……。  
応接間で踞る国彦。  
船の汽笛の音と、  
いよいよ高まる、  
大作達の声……。  
紅色に染まる、  
世界で、  
国彦はふと、  
庭の先を見て、  
呆然と、  
立ち尽くす……。  
国彦の、  
視線の先にあるのは、  
希望か、  
絶望か……。

(了)